

2009年度事業の概要

1 調査と研究	26	研究集会	40
飛鳥・藤原京の発掘調査	26	科学研究費等	41
平城京の発掘調査	26	学会・研究会等の活動	45
企画調整部の研究活動	28	文化庁が実施する宮跡復原整備事業等への 指導・助言・協力等	46
文化遺産部の研究活動	28	●平城宮跡の整備	46
●歴史研究室の調査と研究	28	●高松塚古墳仮整備のための発掘調査	46
●建造物研究室の調査と研究	29	●キトラ古墳出土遺物の調査研究	47
●景観研究室の調査と研究	30	発掘調査現地説明会・見学会	47
●遺跡整備研究室の調査と研究	30		
埋蔵文化財センターの研究活動	31	2 研修・指導と教育	48
●保存修復科学研究室の調査と研究	31	埋蔵文化財担当者研修と指導	48
●環境考古学研究室の調査と研究	31	京都大学(大学院)との連携教育	48
●年代学研究室の調査と研究	32	奈良女子大学(大学院)の連携教育	48
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究	32		
国際学術交流	33	3 展示と公開	50
●中国社会科学院考古研究所との共同研究	33	飛鳥資料館の展示	50
●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究	33	平城宮跡資料館の展示	50
●河南省文物考古研究所との共同研究	33	解説ボランティア事業	51
●韓国国立文化財研究所との共同研究	34	図書資料・データベースの公開	51
●西アジア諸国の文化財修復保存協力事業	34		
●カンボジアAPSARAとの アンコール遺跡群西トップ寺院の共同研究	34	4 その他	52
海外からの主要訪問者一覧	35	刊行物	52
海外からの招聘者一覧	36	人事異動	56
研究者の海外渡航一覧	36	予算等	57
公開講演会	39	職員一覧	58
第104回公開講演会	39		
第105回公開講演会	40		

1 調査と研究

飛鳥・藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥・藤原地区において2009年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡3件、藤原京跡と飛鳥地域で7件である。また、2008年度からの継続調査として甘樫丘東麓遺跡の調査と高松塚古墳の調査を実施した。以下、主要な調査成果について概要を述べる。

藤原宮では、朝堂院回廊・大極殿院回廊の調査を実施した(第160次)。今回の調査は、大極殿院南門の東側、大極殿院回廊東南隅に調査区を設定して調査を実施した。その結果、大極殿院回廊・朝堂院回廊を検出し、両回廊の規模などについての知見を得た。さらに、下層遺構として、藤原宮造営関連遺構を調査し、昨年度の第153次調査で検出した、斜行溝S D10881Bの延長にあたりと考えられる南北大溝を検出した。この南北大溝は回廊の建設にともない東西大溝へ付け替えていたことが新たに明らかになった。従来の調査成果もふまえると、大極殿院南門周辺における、造営資材の搬入、南門造営の開始、回廊造営の開始、内庭・朝庭空間の整備、儀式の場としての使用、という造営から完成、使用に至る一連の過程が遺構変遷の上から具体的に明らかになった。

飛鳥地域では、甘樫丘東麓遺跡について第157・161次調査を実施した。第157次調査では2006年度第146次調査で検出した石垣SX100の延長状況の把握と、遺跡東辺部の状況を確認することを目的とした。調査の結果、石垣の全長が約34mになること、石垣が一連のものではなく、途中で屈折し、南部分を継ぎ足していること、側面にステップ状の石列を付加していることなど、この石垣の系譜・構造的意味に関わる重要な知見を得た。その他にも、遺存状況の良い石敷遺構や良好な土器一括資料を出土した土器廃棄土坑、藤原宮期の土器埋設遺構などを検出した。

第161次調査では、第157次調査区に隣接して丘陵斜面、尾根裾部、谷部の調査が進行中である。丘陵斜面中腹では、区画施設と考えられる柱穴列を検出した。丘陵上部にも遺構が展開する可能性が高まってきたといえる。尾根裾部や谷部でも多数の遺構を検出しており、今後の調査の進展が期待される。

2008年度2～3月におこなった古宮遺跡の調査(第152-8次)では、山田道と関連する斜行溝と東西溝を

検出した。隣接する小墾田宮推定地第2次調査の成果をふまえると、斜行溝は道路北側溝にあたり、7世紀後半代に正方位にのる東西溝へ造り替えられていることが明らかになった。飛鳥川西岸における山田道の変遷と周辺の土地利用についての重要な知見といえる。

檜隈寺周辺では、昨年度の試掘調査をふまえ、伽藍北方の丘陵東斜面と講堂北西平坦面に計6カ所の調査区を設定し、発掘調査を実施した。丘陵東斜面では、掘立柱塀や掘立柱建物などを検出した。檜隈寺の関連施設と考えられ、伽藍北方の土地利用の一端を示す成果である。また、講堂北西側では、石組のL字形カマドをもつ堅穴建物を検出した。L字形カマドは、奈良県内では2例目の検出で、石組のものは全国で3例目である。L字形カマドは渡来系の技術と関連が強く、渡来系氏族の東漢氏の氏寺である檜隈寺の性格をさらに際立たせる遺構である。また、従来檜隈寺では出土遺物から主要伽藍造営以前の前身伽藍の存在が考えられていたが、今回検出した堅穴建物は、出土した瓦や土器からみて7世紀前半～中頃のものであり、主要伽藍以前の前身建物との関連が注目される。

高松塚古墳では、保存施設の撤去にともなう調査をおこない、古墳築造以前の基礎造成や旧地形のあり方について新たな知見を得た。

2009年度の発掘調査にともなって実施した現地説明会、現地見学会は以下の通りである。

飛鳥藤原第157次調査(甘樫丘東麓遺跡)

現地見学会 2009年6月21日 次山 淳

飛鳥藤原第160次調査(朝堂院回廊・大極殿院回廊)

現地説明会 2009年11月29日

高橋知奈津・山本 崇

飛鳥藤原第161次調査(甘樫丘東麓遺跡)

現地見学会 2010年3月20日 番 光

平城京の発掘調査

都城発掘調査部平城地区で2009年度におこなった発掘調査は、平城宮内で3件、平城京内で10件である。また、立会調査は75件に及び、そのうち1件は多量の遺物が出土したため、発掘調査へ変更した。

平城宮内の調査は、第一次大極殿院地区、東院地区、東方官衙地区でおこなった。

第一次大極殿院地区の調査（第454次調査）は、1959年の第2次調査から始まった約50年間にもおよぶ当地区における最後の調査である。調査区は、第一次大極殿院内庭広場の東南部にあたり、調査面積は1556㎡、調査期間は2009年4月～7月である。

調査では、奈良時代前半の第一次大極殿院に関わる遺構を中心に検出した。すでにこれまでの調査で、奈良時代前半の大極殿院内庭広場には3回の礫敷舗装が確認されているが、本調査でもこれらの遺構を確認することができた。また、2回目の礫敷舗装の際に大極殿院南面回廊北側に盛土をおこない、地表面の傾斜を南から北へ低くなるように変更しており、2回目の礫敷舗装は、この盛土をおこなった範囲に広がるということが明らかになった。この時期には南面回廊南門の東西に楼閣を建設し、南面回廊の北雨落溝が機能しなくなるため、新たに南面回廊に並行する東西溝を開削し、そこへ雨水を流すように計画されたと考えられる。以上の排水計画の変更は、大極殿院全体の計画を考察する上でも重要な成果であった。

東院地区の調査（第446次調査）は、これまで継続しておこなっているもので、西で第22次南調査、南で第381次調査と重複する。調査面積は1505㎡、調査期間は、2009年10月～2010年3月である。

検出した遺構は全体で6期の変遷があり、1～3期は第421・423次調査のⅠ～Ⅲ期に、5～6期は同Ⅳ～Ⅴ期に該当する。これらのうち4期は今回の調査で新たに確認した時期である。1期には東西堀と東西方向の回廊に挟まれた幅約14.7mの空地があり、これが中枢部に向かう東西通路となる。通路の北の堀に取り付いて、東西3間、南北4間以上の総柱建物が建ち、井戸を設ける。2期には調査区南半に東西9間、南北4間の総柱建物が建つ。3期には調査区北東部に東西5間、南北4間の総柱建物が建つ。4期は1期の東西通路のほぼ中央に東西堀が設置され、その北側に東西2間、南北5間以上の南北棟建物と、東西5間以上、南北2間の東西棟建物が建つ。5期には調査区北半に南北6間、東西2間以上の総柱建物が建つ。6期には東西堀で挟まれた幅約15mの空地があり、これが中枢部に向かう通路となる。この通路の西は、第22次南調査で検出した門に取り付く。

検出した東院中枢部に向かう幅50尺の通路と総柱建物群は時期が異なり共存しない。さらにこれらと異なる

建物配置を持つ4期を新たに確認し、断絶的な土地利用形態を明らかにした。

東方官衙地区の調査（第466次調査）は、2007年度より継続しておこなっている調査の3年目で、本年は2008年度の調査（第409次）の南側に位置する。調査区は東西6m、南北111m、面積666㎡で、調査期間は2010年1月より開始し、2010年度も継続しておこなっている。

本調査に先立ち、埋蔵文化財センターとの連携により、調査区を含む周辺の東西100m、南北104mの範囲を地中レーダー（GPR）による探査を実施した。その結果、この地区は宮内を南北に流れる基幹排水路SD2700により東西に大きく二つの区画に分かれる可能性が指摘された。発掘をおこなった調査区はこのうち東の区画にあたり、それぞれ築地堀で区画された東西棟の掘立柱建物3棟を確認している。発掘調査で確認された成果と、地中レーダー探査の成果を合わせることで、今後さらなる検討が可能になるだろう。

平城京内の調査は、興福寺南大門の調査などがある。

興福寺南大門の調査（第458次）は、興福寺第1期境内整備事業にともなう調査で、興福寺南大門を全面的に発掘した。調査面積は774㎡、調査期間は、2009年7月～2009年12月である。

興福寺南大門は、中心伽藍が占地する丘陵の南端部に位置し、南方へと開く谷を埋めたうえで基壇を築いている。検出した南大門の基壇は、東西30.8m、南北16.6mで、これよりわずかに小さい規模の掘込地業をおこない、版築工法で築いていた。版築層は最大で厚さ約2.6mで、層相から4つの単位に分かれる。礎石（花崗岩）は版築の途中で据え付けており、創建時のものである。南大門SB9360は桁行2間×梁行5間で、東西23.2m（78.0尺）、南北8.9m（30.0尺）の規模をもつ。中央3間分は門の通路にあたり、その幅は14.3m（48.0尺）である。

基壇中央部で発見した創建時の鎮壇具埋納遺構SX9361は、興福寺の地鎮具・鎮壇具に新たな例を加えただけでなく、寺院の門における鎮壇の一例として特筆すべきものである。納入品は、ガラス小玉13点、和同開珎5枚、茶褐色の有機物（植物質繊維やナツメ種実など）、海産魚類（フサカサゴ科）の頭部である。鎮壇具容器への魚類納入はかつて確認例がなく、茶褐色有機物の品目構成とともにさらなる検討が必要である。

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体等の埋蔵文化財発掘技術者に対する研修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信と展示公開普及、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報の整備充実、国際的な文化財の調査・保護活用に関する協力・援助と国際学術交流あるいは研修等についての企画調整、飛鳥資料館・平城宮跡資料館等における展示公開普及を中心とする、奈良文化財研究所がおこなう研究に係る事業について全体的・総合的に調整し、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。

埋蔵文化財発掘技術者研修については、年度ごとに計画を立案し、高度で専門的な研修を実施している。2009年度も、遺跡の発掘調査や整備報告において必要性が高い分野、あるいは、保存活用や、専門性の高い知識・方法が求められる課題に関する研修を実施した。具体的には、保存科学、文化財写真、報告書作成等について引き続き実施するとともに、分野を絞り込んで、年輪年代、地質環境なども取り上げた。かなり専門に特化した研修であったが、必要性の高さもあってか、好評であった。

文化財情報電子化研究およびシステム構築については、「第14回遺跡GIS研究会」を開催するとともに、国内外の学会や研究会等において研究成果を公表したほか、遺跡情報の収集管理や活用に関する情報収集をおこない、今後のシステム構築、改良等の検討材料とした。一方、日常的には遺跡・図書・写真データベースおよび航空写真データの入力、NARSフィルムのマイクロ化、NARSフィルム・ガラス乾板・大判フィルム・35mmスライドフィルム・航空写真画像のデジタル化などを継続しておこなっている。

展示公開および普及に関しては、飛鳥資料館での展示・研究、平城宮跡資料館などでの展示公開事業を統括的に担当している。このうち飛鳥資料館については、「キトラ古墳壁画四神 一青龍白虎一」、「甍るクメール文明—世界文化遺産アンコール遺跡群—」、「北方騎馬民族のかがやき—三燕文化の考古新発見—」、「飛鳥の考古学2009」を開催した。これらについては別項にまとめているので参照されたい。平城宮跡資料館については、遷都1300年に合わせて改修をおこなった。なお、

改修期間中は、本庁舎にガイダンスコーナーを設置して常設展（発掘調査速報、国際学術交流、情報コーナー）・企画展（「地下の正倉院展—二条大路木簡の世界—」）を実施し、調査研究の成果公開や情報発信に努めた。

国際協力機構、ユネスコアジア文化センター（ACCU）等が実施する研修への協力事業として、大エジプト博物館保存修復センタープロジェクトの関連で、出土遺物の調査法についてエジプト人2名の研修を実施した（国際協力機構）。また、ACCU関連としてラオス文化情報省文化遺産局所属の研修生3名を招き、遺跡の記録方法等の研修を実施した。また、モンゴル国立文化遺産センター歴史文化遺産修復部所属の研修生3名を招き、文化財（木製品・金属製品）の保存科学等の研修を行った。さらに、ベトナム（ホイアン）で開催された現地ワークショップ（木造建造物の調査・記録法と修理・管理方針の作成）への協力をおこなった。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部の4研究室では、「書跡資料・典籍・古文書・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「庭園・遺跡整備」について、専門的かつ総合的な調査研究をおこなっている。その成果は、各種文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策など、国の文化財保護行政にも活かされている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、日本を代表し、世界文化遺産に登録されるような古寺社が所蔵する書跡資料・歴史資料について、奈良を中心として、継続的な調査研究をおこなっている。また、古都の旧家等に伝来した歴史資料についても調査研究をしている。

2009年度の調査は、興福寺・薬師寺・石山寺・仁和寺・東大寺・唐招提寺・氷室神社大宮家所蔵の書跡資料・歴史資料調査をおこなった。興福寺調査は、2008年度に刊行した『興福寺典籍文書目録第四巻』に収録できていない分を調査し、第105函・106函・107函の調書作成と、第90函等の写真撮影を実施した。また

『目録第四巻』収録分から、注目すべき資料を『奈良文化財研究所紀要2009』で紹介した。戦国時代大和国の飢饉・一揆等の実態を記した生々しい資料である。薬師寺調査は、第45函～第54函の調書作成と、第24函の写真撮影を継続して実施した。

石山寺では、奈良時代の経巻である大智度論の熟覧・詳細な調書作成と、ブローニー版での写真撮影をおこなった。その結果、現存大智度論の編集過程に新知見を得ることができた。仁和寺では、御経蔵聖教第31函～35函の調書原本校正と、第31～33函・第151函の写真撮影を実施した。

東大寺では、東大寺図書館収蔵庫第4号室収蔵の新修東大寺文書聖教の調査を、科学研究費補助金も充当して実施した。第5函・第15函の写真撮影を実施し、また第53函・54函・55函・59函を調査して、目録データをパソコンに入力した。唐招提寺所蔵資料については、境内とその周辺を描いた絵図類を調査・写真撮影した。江戸時代前期の絵図にはかなり正確なものがあり、古代の伽藍配置を推測する材料になると判断された。その成果は2009年度戒律文化研究会の大会で報告した。氷室神社大宮家文書については、昨年度に引き続き奈良市教育委員会との間で共同研究をおこない、未成巻文書仮第2函1巻～35巻の調書作成を実施した。

また、平城宮跡周辺の旧家が所有する絵図・古文書について、調査・写真撮影を実施した。平城宮とその周辺地域の近世絵図や反別帳など、当時の実態が窺える資料を確認できた。

その他調査協力の依頼を受けて、文化庁依頼の醍醐寺聖教調査や、東大寺依頼の東大寺貴重書調査などに協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群および近代和風建築等に関する調査研究をおこなうことにより、わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に資する基礎データの蓄積を継続的におこなっている。また、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の構造・技法について再検証するための調査研究を、現存建築のみならず、修理などの際に保存された古材、発掘遺構・遺物などを研究対象として進めている。以下2009年度におこなった主な調査研究内容を

を紹介する。

古代建築に関する調査研究では、法隆寺所蔵の古材についての調査を開始した。法隆寺では今年度から、奈良県教育委員会に委託し、リスト整理および新収蔵庫への収納を開始した。当研究所では、この作業にともない、古材の採寸、痕跡図作成、写真撮影等、基本情報の資料化とともに、解体修理時にはおこなわれていなかった、加工痕調査や年輪年代調査や顔料分析等、新たな視点での調査をおこなっている。2009年度から2010年度には金堂の古材を調査し、2011年度に報告書を刊行する予定である。

受託調査として、奈良県近代和風建築総合調査、津和野町社寺建築調査をおこなった。奈良県近代和風建築総合調査は奈良県が2008年度から開始したもので、2009年度は奈良県が作成した一次調査リストに基づいて、二次物件を抽出し、調書作成、平面実測、写真撮影、関連資料調査をおこなった。2010年度に報告書を発刊する予定である。津和野町社寺建築調査は、津和野町が2008年度からおこなっている総合的文化財把握モデル事業の一環としておこなったものである。津和野町が作成した調書をもとに109社寺、200棟におよぶ基本台帳を作成し、57社寺、135棟について二次調査、その上で、13件について三次調査をおこなった。また、中世末期に建築された鷲原八幡宮については、価値を明確にするための詳細な調査をおこなった。調査報告書は、2010年度に刊行する予定である。

国外調査として、当研究所が海外関係事業として実施しているカンボジア・西トップ寺院の現地調査をおこなった。現況の実測図作成をおこないながら、構造的特徴、変遷の過程、崩壊の状況の把握をおこなった。また、文化庁がおこなっている海外協力事業の一環として、ベトナム・フエ省フクティック村の調査をおこない、農村集落保存に協力した。

調査研究の一環として、研究所保管資料のうち、建造物乾板写真の画像デジタル化と、文化財建造物保存修理時における現状変更説明資料の刊行を近年継続している。2009年度に刊行した現状変更説明資料は、1958年～1961年分で、これを本文編と図版編とに分けて刊行した。

この他、全国各地で実施されている文化財建造物等の保存関係事業・史跡整備事業にかかる建造物復原等について援助・助言をおこなっている。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、文化的景観の保護施策と学術研究に資する目的で、文化的景観に関する基礎的・体系的な情報の収集・発信をおこなうとともに、研究集会等を開催して情報の共有と深化を図っている。また、四万十川流域等の事例研究を通じて保護の実践における諸問題の整理・解決に取り組んでいる。

基礎的・体系的な情報の収集・発信としては、文化的景観に関する基礎的な情報（国内の関係法令、各重要文化的景観の概要、文化的景観に関連する文献等）の収集をおこなった。収集した情報は、新設した文化遺産部景観研究室Webサイトにて順次公開するとともに、出版刊行物として『文化的景観資料集成 第1集 文化的景観保存計画の概要（I）』をまとめた。

情報の共有と深化を図る目的で、文化的景観研究集会（第2回）を開催するとともに、文化的景観に関する学術と保護行政を横断的に議論する場としての文化的景観学研究会を立ち上げた。研究集会（第2回）は、「生きたものとしての文化的景観—変化のシステムをいかに読むか—」をテーマに、変化を前提とする文化的景観の価値評価の方法についての議論をおこなった。また、昨年度開催した研究集会（第1回）の成果を『文化的景観研究集会（第1回）報告書』として出版刊行した。

事例研究としては、平成18年度より継続して実施している四万十川流域の文化的景観につき、調査報告書の刊行に向けた成果のとりまとめをおこなうとともに、重要文化的景観の追加選定に向けた取り組みへの協力をおこなった。また、受託調査研究として、宇治の文化的景観における伝統的家屋の調査を通じて、文化的景観の価値評価をその整備活用に結びつけるための手法を検討し、新たに保護対象となった都市に関連する文化的景観の諸問題につき、基本的な考え方を整理した。その成果は次年度に報告書にまとめる予定である。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室では、全国各地における遺跡の整備に関する調査と研究をおこない、その情報を収集・整理・普及するとともに、遺跡の保存と活用に関する基本的な考え方やその事例への適用を検討することを主たる業務としている。調査研究活動においては、遺跡の保存段階から、整備計画の立案、整備後の遺跡の公開・活用にいたるまでの総合的過程を視野に入れて取

り組んでいる。

現在、中心的に取り組んでいるのは「遺構露出展示に関する調査研究」である。具体的には、特に地下に埋蔵されていた遺構を露出展示している事例を中心として全国的な状況を網羅的に把握し、それぞれに生じている課題及びこれまでの対処に係る実績等を検証する作業を基礎として、実りある遺構露出展示のための基礎的検討を行うとともに、既に遺構露出展示を行っている事例が抱える課題への対処手法を整理し、また、これから遺構露出展示を検討する場合の指針案を提示することなどを目的としている。

今年度は、昨年度に作成した「遺構露出展示事例所在一覧（基礎調査／未定稿）」について、都道府県教育委員会文化財保護主幹課の協力を仰いで、追補・修正を検討し、次年度に構築を計画している「遺構露出展示データベース～」の基礎となる資料を作成した。この成果については、昨年度に、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室と合同で開催した研究集会の報告書『埋蔵文化財の保存・活用における遺構露出展示の成果と課題』にも掲載した。

一方、遺跡整備の今日的な成果と課題を広く検討するため、『遺跡内外の環境と景観 ～遺跡整備と地域づくり～』をテーマとする研究集会を開催した。この研究集会では、遺跡整備における環境復元や景観保全のこれまでの成果を参照しつつ、「世界遺産」、「文化財総合的把握モデル事業」、「歴史的風致維持向上計画」などに関する近年の動向を反映して、『遺跡の保護と計画』を主題とした講演2つと、『遺跡の環境と復元』及び『遺跡の景観と保全』を主題とした報告5つによる考え方や実践事例を踏まえ、地域づくりにおける遺跡整備の意義などについて討論をおこなった。

さらに、地方公共団体等からの依頼に基づき、各地で進められている遺跡等の保存と活用に関わる計画立案、整備事業の実施等をはじめ、地域における文化遺産の総合的な保存と活用などについて、援助・助言をおこなった。

また、庭園に関する調査研究として、『東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会』を開催し、日本・中国・韓国の庭園史・建築史の専門家から成る円卓の議論による結論について、英語版報告書及びこれを補足するものとしての日本語版報告書を刊行するとともに、HP上で公開した。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの4つの研究室は、それぞれの中期計画に従って埋蔵文化財の調査技法に関する研究開発を行いつつ、国や地方公共団体の要請に応じて、専門的な助言や協力を行っている。

●保存修復科学研究室の調査と研究

考古資料の材質・構造の調査法及び保存・修復に関する実践的研究においては、ガラス製品の製作技法の解明と劣化状態の診断法の確立を目的としたレーザーラマン分光分析法の応用研究、土ごと取り上げられた平安時代の錠前に対するX線コンピュータドモグラフィの適用と埋没状況の3次元解析によるレプリカ作製ならびに保存修理への活用（九博と共同）、漆や繊維製遺物の分析による考古資料の分析データの集積、木材の貧溶媒法による含浸薬剤の析出実験に取り組んだ。

一方、遺跡の保存・整備・活用に関する技術開発研究においては、遺構の露出展示をおこなうための遺構内における土中水移動の現状の把握と遺構を露出した場合の土中水移動変化について予測することを量的におこなうことを目的として、福島市宮畑遺跡および日田市ガランドヤ古墳をフィールドとして、土試料の不飽和水分移動特性を表すパラメータの推定をおこなった。

また、九州国立博物館との共催で「遺構・遺物の保存と展示・活用の諸問題」の研究集会を開催した。

受託事業として、重要文化財奈良県黒塚古墳出土品事前調査並びに保存修理（文化庁）、長野県中野市柳沢遺跡出土の青銅器保存修復業務委託（長野県）、史跡ガランドヤ古墳石室石材劣化調査（大分県）、矢本横穴墓群出土琥珀玉の材質分析（宮城県）、勝瑞城跡出土布片の材質分析と保存処理（徳島県）、史跡加賀藩主前田家墓所石造物保存対策調査（石川県）を実施した。共同研究としては、前原市閨地頭給遺跡出土準構造船の真空凍結乾燥法による保存研究、北本市デーノタメ遺跡出土漆塗り土器の保存処理に関する共同研究（埼玉県）、三野古墳群出土遺物の調査分析（立命館大学）松平忠雄墓所出土品の保存処理に関する保存科学的研究（愛知県）特別史跡、一乗谷朝倉氏遺跡出

土ガラスに関する保存科学的研究（福井県）の5件を実施した。また、東京国立博物館との機構内協力事業により、塑像の保存修理のための材質分析を実施し、保存修理をおこなった。

国宝高松塚古墳壁画の保存修理（文化庁委託）において、壁画の劣化原因の追及と保存修復に資するデータの集積を目的とした壁画材料の分析調査をおこなった。また、壁画をより安全に静置するための安定化支持具を製作した。

●環境考古学研究室の調査と研究

環境考古学研究室では、環境考古学、動物考古学研究の一環として、関連する国内外の発掘調査や、その後の整理、分析について指導および助言、報告書の執筆を行っている。

今年度の成果として、石川県真脇遺跡（縄文）、奈良県藤原宮朝堂院（古代）、兵庫県兵庫津遺跡（近世）、福岡県大宰府条坊跡（中世）、長崎県カラカミ遺跡（弥生）、佐賀県東名遺跡（縄文）などの分析・報告を行った。とくに東名貝塚は、受託研究として動物遺存体10,000点以上を同定、集計し、報告書の執筆を行った。その結果、縄文海進の進行する中、東名遺跡では周辺に広がる干潟や河口、背後の平野を利用しただけでなく、山岳地帯も含む様々な動物相を利用していたことを明らかにできた。さらに、動物骨や鹿角に残された加工痕を観察して、骨角器の製作工程や加工技術を復元した。また、海外調査として、ラオスやモンゴルで動物利用に関する民族考古学的調査を行った。

学会等の講演や発表は、北九州市立自然史・歴史博物館で「環境考古学と海」（一般講演）、民博で開催された日本文化人類学会で「肉食の忌避という虚構—動物考古学からの視点—」（パネラー）、福山市で開催された部落解放研究全国集会で「動物と関わった人々」（分科会）を行い、茨城県自然博物館で開催された動物考古学研究集会では「中世遺跡出土の鹿角製馬具（オモゲー）」や「動物遺存体に関わる遺跡形成過程の研究—モンゴルにおける民族考古学的調査を事例として—」を含む4本の発表を行った。海外では、アメリカ考古学会において「Year-round activities of the large wet shell mounds during the Jomon Period, JAPAN」と題し、日本における貝塚の研究成果について発表を行った。また、海外より米国ワシントン州

南ピュージェットサウンド・コミュニティー・カレッジのDale Croes教授や李匡悌教授を招き、講演会を開いた。

現生動物骨格標本は、口之島牛、カマイルカ、カワネズミ、セキショクヤケイなどを製作、収集した。さらに、骨格標本を外部の研究者とも共有できるよう『環境考古学9 鳥類・両生類・爬虫類標本リスト』（埋蔵文化財ニュース138号）を刊行し、同時に動物考古学を志す若い研究者のため、現生動物の骨格標本を作成する方法を紹介した。

●年代学研究室の調査と研究

年代学研究室では、木材の年輪を基にした木造文化財の年代測定を主におこなっている。2009年度は、3府県下3遺跡から出土した考古学関連の木材資料、2府県下3棟の建造物、7府県下9軀の木彫像に対して、年輪年代調査や樹種同定調査を実施した。とりわけ特筆できるのが、奈良国立博物館で特集展示された奈良・金峯山寺釈迦如来坐像と兵庫県所蔵天部形立像の年輪年代調査である。両像は、かねてより作風などから同一作者の手による可能性が高いことが指摘されていたが、今回の年輪年代調査の結果、ともに930年代頃の用材調達であることが明らかとなり、その蓋然性の高さを裏づけることになった。また、平成13年から20年度にかけて継続的に実施してきた法隆寺西院伽藍の年輪年代調査の成果について、「年輪年代法による法隆寺西院伽藍の総合的年代調査」として『佛教藝術』308号に論文発表した。

将来の年輪年代学のあり方を見据えた取り組みとしては、年輪年代学の適用樹種の拡大を目指した基礎研究、および文化財の非破壊年輪年代調査のための技術開発などをおこなった。奈良文化財研究所では、従来、ヒノキ、スギ、コウヤマキ、ヒバの4樹種を主な研究対象としてきたが、近世の建築用材に多用されるツガについても年輪年代学的な基礎研究を実施し、年輪年代測定への応用の可能性が高いことを確認した。さらに、マイクロフォーカスX線CTを用いた高精度三次元画像による文化財の非破壊構造分析や非破壊年輪年代測定などの技術的な課題にも取り組み、その一環として特許「木材又は木造文化財の年輪幅又は密度測定方法」（特許権者：独立行政法人国立文化財機構、発明者：大河内隆之、特許第4310374号）を取得した。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

遺跡・調査技術研究室は、2006年4月の機構改編により、遺跡およびその調査法の研究と文化財の調査技術の開発・応用を主要な業務とする研究室として再出発した。過去に存在した集落遺跡、測量、発掘技術、遺跡調査技術、遺物調査技術の各研究室の伝統と蓄積を継承した研究の推進を目的としている。

本年度は、遺跡およびその調査法の領域では、前年度にひきつづき、古代の寺院および官衙関連遺跡などの資料を収集整理するとともに、遺跡の性格認定の指標や、発掘調査で抽出すべき基本的属性についての研究をおこなった。収集・補訂した資料はデータベース化し、遺跡の性格や所在地、文献目録、おもな遺構と遺物、建物の詳細データと、地図や遺跡全体図、建物図面などの画像データを、奈良文化財研究所のホームページ上で公開している。また、地方官衙遺跡と豪族居宅遺跡の門遺構の資料集成を実施した。このほか、文化庁の委託により、『発掘調査のてびき』（集落遺跡発掘編および整理・報告書編）を作成・刊行した。

一方、文化財の調査技術の領域では、測量・計測、探査を中心に活動をおこなった。測量・計測分野では、低価格の三次元レーザースキャナーの実用化を達成し、生駒本願寺裏山古墓群や檜前遺跡群（ともに奈良県）、京都国立博物館蔵の安祥寺盤竜石柱、東京国立博物館蔵の塑像、中国遼寧省の隋唐期墳墓出土資料などの三次元計測を実施した。探査分野では、台渡里遺跡（茨城県）、西都原古墳群（宮崎県）、伊勢国府（三重県）、天良七堂遺跡、三軒屋遺跡（ともに群馬県）、胡桃館遺跡（秋田県）、芝生城（徳島県）、平城宮、藤原宮、桜井茶臼山古墳（いずれも奈良県）、銅山製鉄所、苗代川窯（ともに鹿児島県）、大宰府（福岡県）で地方公共団体や大学などと共同調査をおこなった。なかでも、伊勢国府での試行を基礎に、改良を加えたGPR（地中レーダー）機器は、天良七堂遺跡での総柱建物の確認、三軒屋遺跡での下層遺構の形状の確認、平城宮での建物等の詳細の確認といった成果を生んでいる。

また、UNESCO-ICOMOSの委員会であるCIPAの国際学会を京都で開催し、世界各国より参加者を得た。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、現在、中国、韓国、カンボジアの3カ国の研究機関と以下の項目に述べるような学術共同研究を実施している。このほか、アフガニスタンとイラクを対象とする西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業や2006年6月に発足した文化遺産国際協力コンソーシアム（事務局は東京文化財研究所に設置）のおこなう支援協力事業にも協力している。2009年度の各事業の概要は以下の通りである。

●中国社会科学院考古研究所との共同研究

この共同研究では、河南省洛陽市に位置する北魏洛陽城の宮城中枢部分を解明することを目標とした。中国側の事前調査では宮城の正門と太極殿をとおり中軸線上にはいくつかの建物基壇が存在していることをあきらかにしている。2008年度は宮城正門（閭闔門）の北側にある2号門址およびその周辺を発掘調査した。2009年度は2号門址の北に位置する3号建物址の調査を実施した。

2009年春季は補足調査として、2号門基壇について南北と東西方向の断ち割り調査を実施し、2号門基壇の造営過程について知見を得た。つぎに、3号建物址の南北の規模、建物の左右にとりつく城壁の様相、基壇周囲の道路遺構の位置の確認を目的として試掘調査を実施した。同年秋季は春季の成果をふまえて3号建物址を全面的に発掘調査した。東西60m、南北30m、発掘面積は1800㎡である。基壇の規模は東西約36m、南北9mの不整形で、基壇の東西に取り付く基壇を検出した。基壇上には、東西4間、南北3間の柱痕跡を確認した。多量の瓦、磚、土器、その他金属製品などが出土した。

2010年度春季は3号建物址の東西に取り付く基壇の実態を把握するため試掘調査を実施し、秋季には3号建物址周囲の未発掘部分の調査を実施する予定である。

●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究

遼寧省文物考古研究所との共同研究は、2006年度から朝陽市隋唐墓出土副葬遺物の調査・整理・研究を行っている。2009年度は6月7日から14日の8日間と、3月9日から16日の8日間、瀋陽市の遼寧省文物考古

研究所で考古学的調査を実施した。調査者は、春が所外の研究者も含めて計8名（うち2名が10日まで）、冬が同じく計6名（うち2名が13日から）である。冬は、研究所が内部改装直後であったが、当初の予定通り調査を実施できた。

今年度の調査対象は遼寧省文物考古研究所などによって朝陽市で発掘調査された、^{せんいしやう}織維廠墓、^{ようわ}楊和墓、^{きやうほうかく}中山村墓、^{ばいかい}九鳳閣西門房、^{かえん}玫瑰家園墓、^{しんふしやう}双塔小区墓、^{なんばしやう}馬場住宅楼墓、^{しんふしやう}南馬廠M1墓、^{しんふしやう}襯布廠墓、^{しんふしやう}紡績路立体交差橋墓など14カ所に所在した唐墓の副葬品である。陶俑、陶磁器類、土器類、銅銭、鉄製品、土製品など計98点の出土遺物を調査した。

冬の調査期間中、主として遼寧省文物考古研究所の研究者を対象として研究発表を行った。3月15日に研究所の5階会議室を会場として中国側研究者1名、日本側研究者3名が発表した。日本側の発表は「唐代鉄製鋏の製作技法について」（小池伸彦）、「探査と3D計測について」（金田明大）、「遼寧省出土の釉陶をめぐって－三彩陶枕と黄釉俑を中心として」（高橋照彦・大阪大学大学院）であった。

このほか10月には、遼寧省文化庁長官、遼寧省文物考古研究所員など5名を招聘し、平城宮大極殿の整備状況や飛鳥藤原地区の発掘調査状況等を視察し、学術交流を深めた。

●河南省文物考古研究所との共同研究

2009年度は第Ⅱ期5カ年計画の最終年度にあたり、河南省文物考古研究所が調査した鞏義市水地河地区の窯跡出土品調査を主に実施した。2009年6月に2名、10月に5名、2010年3月には5名の研究員を中国に派遣し、鞏義市水地河・白河地区出土の唐三彩、北朝白釉、青釉などの陶磁器と、漢魏洛陽城出土陶磁器を調査した。その結果、黄冶窯および白河窯で生産した陶磁器の系統的把握のための基礎視点が明確になった。特に北朝白釉、青釉は中国における白瓷、青瓷の初現に関して注目される資料であり、漢魏洛陽城出土陶磁器の比較研究においても類似する資料を見出すことができている。生産地と消費地での様相が具体的に解明できる可能性があり、流通や年代に関する有益な知見が得られると期待される。

2009年度は、中国側の大きな行事として中国古陶磁学会が鄭州で開催され、2009年10月に5名の研究員を派遣してこの学会に参加した。学会では黄冶窯および

白河窯の調査成果に関する報告が多数あり、中国国内での関心も高く、重要な成果として受け止められていることが再確認できた。これは共同研究の成果が中国でも高く評価されていることの表れであり、今後とも調査成果を広く公開していきたい。また、9月には中国側から5名が来日し、学術講演会を開催するとともに、日本国内の関連資料を調査した。

調査と併行して、第Ⅲ期5カ年計画の内容について協議を行った。次期計画は発掘調査を行わず、出土品の整理と報告書の刊行を主とすること、黄冶窯および白河窯の調査研究を中心とするものの、河南省内の他の遺跡の出土品を対象に加えて、より総合的な調査研究を実施することとした。2010年3月15日には、文物考古研究所の孫新民所長を迎えて奈良文化財研究所で議定書の調印式を行い、次年度以降も共同研究を継続して進めていくこととなった。なお、黄冶窯発掘調査概報の日本語版は2010年3月に刊行した。

●韓国国立文化財研究所との共同研究

2005年12月より大韓民国国立文化財研究所との間で、「日本の古代都城並びに韓国古代王京の形成と発展過程に関する共同研究」というテーマのもとに共同研究をすすめている。2009年度は、第二期3カ年の2年目にあたる。今回の共同研究には研究細目として掲げた4課題に則して奈良文化財研究所8名、韓国文化財研究所9名の研究者が参加し、それぞれが設定した都城制・考古資料・保存科学・古建築・遺跡整備・木簡などに関する13件の研究を実施している。今年度の実績は、研究員派遣6名、研究員受け入れ6名である。

2006年度より開始した国立慶州文化財研究所との発掘調査交流では、奈良文化財研究所より研究員1名を派遣し、新羅王京遺跡および新羅古墳群のチョクセン遺跡等で共同発掘調査を実施した。この間、慶州を中心として火葬墓関連資料の調査をおこなった。慶州文化財研究所からは研究員1名を受け入れ、飛鳥地域の甘樫丘東麓遺跡および平城宮跡において共同発掘調査を実施した。合わせて奈良を中心に都城遺跡・古代寺院遺跡の見学をおこなうとともに、徳島県立鳥居記念博物館において、鳥居龍蔵による朝鮮半島調査に関連した資料を収集した。派遣期間は各々一ヵ月半である。また、発掘調査交流状況視察のための派遣1件を実施している。

●西アジア諸国等の文化財修復保存協力事業

アフガニスタン、イラク並びに周辺諸国を対象として文化遺産保存修復協力にかかわる事業を東京文化財研究所と共同で実施している。

考古学研修では、アフガニスタン文化情報省考古学研究所からの2名の研修生に対して、遺跡測量・遺物実測の研修、平城宮跡東院地区発掘現場での実習を9月24日から12月1日に行った。

また、保存科研修を9月2日から9月10日にイラク国立博物館からの4名と大エジプト博物館保存修復センタープロジェクトからの2名に対して行った。内容は、テキスタイルの分析法として繊維の同定、染料の同定などの講義と実習、遺物の構造調査法に関して、X線ラジオグラフィについての講義および実習をおこなった。

●カンボジアAPSARAとのアンコール遺跡群西トップ寺院の共同研究

考古班は7月に発掘調査を、12月には遺物の整理作業をおこなった。発掘調査では仏教テラスの東に2基対照的に並んでいるラテライト製のストゥーパのうち、南ストゥーパの基壇周囲を調査した。その結果、基壇下辺から青磁小壺が出土し、地鎮のあり方が推定できるとともに、このストゥーパの建立年代を推定することができた。12月の遺物調査は、これまでの調査で出土した中国陶磁や、仏教テラスで大量に出土した瓦について整理作業をおこなった。

建築班は12月と2月に調査をおこなった。現在の状態を記録するとともに、詳細な観察による建立過程の推定を試みた。3月には若手研究者2名を3月16日から24日までの9日間招聘した。

今年度の当該事業の中で特筆すべき項目として、タニ窯跡博物館の開館をあげることができる。タニ窯跡群は本事業によって1999年と2000年に発掘調査をおこない、2005年に報告書を刊行した。その後、博物館計画の進行に伴い、展示物の選定・補修、展示計画などに協力をおこなった。調査から博物館開館に至る当研究所の協力について、カンボジア政府からサハメトレイ勲章の授与が計画され、12月15日の博物館開館式典に合わせて、アプサラ議長のソク・アン副首相より田辺所長に勲章の授与がおこなわれた。

- 石村 智：カンボジア王国／09.6.1～6.6／アンコール歴史遺跡保存開発国際調整委員会（ICC）出席と西トップ寺院の調査／運営費交付金
- 井上 和人：中華人民共和国／09.6.7～6.10／遼寧省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
- 小池 伸彦：中華人民共和国／09.6.7～6.14／遼寧省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
- 牛嶋 茂：中華人民共和国／09.6.7～6.14／遼寧省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
- 加藤 真二：中華人民共和国／09.6.7～6.14／平成21年度秋期特別展および図録に使用する写真の撮影／運営費交付金
- 豊島 直博：中華人民共和国／09.6.7～6.14／遼寧省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
- 金田 明大：中華人民共和国／09.6.7～6.14／遼寧省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
- 玉田 芳英：中華人民共和国／09.6.15～6.19／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
- 丹羽 崇史：中華人民共和国／09.6.15～6.19／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
- 森本 晋：スペイン／09.6.20～7.4／第33回ユネスコ世界遺産委員会出席／運営費交付金
- 石村 智：スペイン／09.6.21～7.4／第33回ユネスコ世界遺産委員会出席・情報収集／運営費交付金
- 箱崎 和久：中華人民共和国／09.6.21～6.30／中国遼代の八角建物を中心とする古建築に関する資料収集／科研費
- 丹羽 崇史：中華人民共和国／09.6.25～6.28／河北省文物考古研究所への借用品の返却／運営費交付金
- 杉山 洋：カンボジア王国／09.6.30～7.5／バカオン窯跡群の調査／他機関負担
- 林 正憲：カンボジア王国／09.7.21～7.27／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 杉山 洋：カンボジア王国／09.7.21～7.27／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 石村 智：カンボジア王国／09.7.21～7.27／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 加藤 真二：中華人民共和国／09.7.23～8.3／平成21年度秋期特別展および常設展リニュアルに関わる関連資料の調査／運営費交付金
- 松井 章：大韓民国／09.7.26～7.30／慶南考古学研究所において金海貝塚出土動物遺存体の整理、報告書作成の打合せ。韓国国立中央博物館で資料調査／科研費
- 井上 和人：ベトナム社会主義共和国／09.7.27～7.30／ベトナム・タンロン皇城遺跡調査研究支援（日越専門委員会出席）／他機関科研費
- 石村 智：ベトナム社会主義共和国／09.7.27～7.30／ベトナム・タンロン皇城遺跡調査研究支援（日越専門委員会出席）／他機関科研費
- 平澤 毅：イタリア共和国／09.7.29～8.4／庭園整備の日伊比較研究ワークショップほか／他機関科研費
- 山崎 健：モンゴル国／09.8.5～8.15／モンゴルにおける動物解体の調査／科研費
- 島田 敏男：ベトナム社会主義共和国／09.8.6～8.15／ベトナム国フエ省フクティック村の集落調査／他機関負担
- 鈴木 智大：ベトナム社会主義共和国／09.8.6～8.15／ベトナム国フエ省フクティック村の集落調査／他機関負担
- 馬場 基：大韓民国／09.8.11～8.15／「東アジア木簡学の確立」に関する現地調査および研究／他機関科研費
- 今井 晃樹：大韓民国／09.8.17～8.23／韓国における古代都城、儀礼関連の遺跡遺物調査／科研費
- 清水 重敦：中華人民共和国／09.8.17～8.25／中国における古代建築の造形・建築技術に関する現地調査／科研費
- 松井 章：大韓民国／09.8.20～8.24／慶南考古学研究所において金海貝塚出土動物遺存体の整理、報告書作成の打合せ／科研費
- 肥塚 隆保：モンゴル国／09.8.21～8.29／モンゴル国、ヘンティ県に所在するアラシャーン・ハダ、セルベンハルラーガー両遺跡における石造文化財の保存のための現地調査／東文研負担
- 高妻 洋成：モンゴル国／09.8.21～8.29／モンゴル国、ヘンティ県に所在するアラシャーン・ハダ、セルベンハルラーガー両遺跡における石造文化財の保存のための現地調査／東文研負担
- 脇谷 草一郎：モンゴル国／09.8.21～8.29／モンゴル国、ヘンティ県に所在するアラシャーン・ハダ、セルベンハルラーガー両遺跡における石造文化財の保存のための現地調査／東文研負担
- 田村 朋美：モンゴル国／09.8.21～8.29／モンゴル国、ヘンティ県に所在するアラシャーン・ハダ、セルベンハルラーガー両遺跡における石造文化財の保存のための現地調査／東文研負担
- 森先 一貴：ロシア連邦／09.9.15～9.20／ロシア科学アカデミー主催の国際会議「更新世-完新世における極東・東アジアの環境変化」への出席・発表／他機関負担
- 庄田 慎矢：大韓民国／09.9.17～9.20／日韓集落研究会第5回共同研究会参加のため／他機関科研費
- 加藤 真二：中華人民共和国／09.9.22～9.29／平成21年度秋期特別展の展示品検品・借用／運営費交付金
- 丹羽 崇史：中華人民共和国／09.9.22～9.29／平成21年度秋期特別展の展示品検品・借用／運営費交付金
- 森本 晋：マルタ共和国／09.9.22～9.29／「考古文化遺産におけるヴァーチャルリアリティ国際学会」出席／運営費交付金
- 森本 晋：台湾／09.10.5～10.10／国際学会「人間性と社会科学におけるGIS2009」での研究発表／科研費
- 杉山 洋：大韓民国／09.10.7～10.10／「東アジアにおける百済」国際フォーラムにおける出席と発表／先方負担
- 栗野 隆：大韓民国／09.10.13～10.16／韓国の遺跡の整備・活用に関する現地調査／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 肥塚 隆保：中華人民共和国／09.10.16～10.20／東アジア文化遺産保存学会への参加および研究発表／運営費交付金
- 降幡 順子：中華人民共和国／09.10.16～10.20／東アジア文化遺産保存学会への参加および研究発表／運営費交付金
- 田村 朋美：中華人民共和国／09.10.16～10.20／東アジア文化遺産保存学会への参加および研究発表／運営費交付金
- 森本 晋：タジキスタン／09.10.19～10.30／ワークショップ「中央アジア出土壁画の保存修復2009」出席／運営費交付金
- 玉田 芳英：中華人民共和国／09.10.21～10.26／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
- 小田 裕樹：中華人民共和国／09.10.21～

- 10.26/河南省文物考古研究所との共同研究
/運営費交付金
- 城倉 正祥：中華人民共和国/09.10.21～10.26/河南省文物考古研究所との共同研究
/運営費交付金
- 丹羽 崇史：中華人民共和国/09.10.21～10.26/河南省文物考古研究所との共同研究
/運営費交付金
- 鳥田 敏男：ベトナム社会主義共和国/09.10.24～11.3/ユネスコ・アジア文化センター「文化遺産ワークショップ2009」ベトナム社会主義共和国・ホイアン市における現地研修出講/他機関負担
- 田辺 征夫：大韓民国/09.10.26～10.28/韓国国立文化財研究所主催『東アジア文化遺産フォーラム』への参加/先方負担
- 高田 貫太：大韓民国/09.10.26～10.28/韓国国立文化財研究所主催『東アジア文化遺産フォーラム』への参加/先方負担
- 井上 和人：ベトナム社会主義共和国/09.10.28～10.31/タンロン皇城遺跡の調査研究支援/他機関科研費
- 平澤 毅：大韓民国/09.10.28～11.1/「景勝地の現在と将来に関する韓中日国際シンポジウム」への出席と発表・討論等/先方負担
- 杉山 洋：インドネシア共和国/09.11.1～11.8/ボロブドゥール国際会議出席と現地調査/先方負担
- 城倉 正祥：中華人民共和国/09.11.4～1.15/中国社会科学院考古研究所との共同研究/運営費交付金
- 肥塚 隆保：大韓民国/09.11.10～11.13/光州博物館からの招へい（保存科学研究の交流）/先方負担
- 高妻 洋成：大韓民国/09.11.10～11.13/光州博物館および韓国中央博物館において所蔵する資料の調査と資料収集/科研費
- 杉山 洋：カンボジア王国/09.11.15～11.23/アンコール文化遺産保護に関する研究協力/運営費交付金
- 小野 健吉：大韓民国/09.11.23～11.25/益山王宮里遺跡の曲水庭園遺構調査/運営費交付金
- 井上 和人：中華人民共和国/09.11.29～12.4/中国社会科学院考古研究所との共同研究/運営費交付金
- 今井 晃樹：中華人民共和国/09.11.29～12.4/中国社会科学院考古研究所との共同研究/運営費交付金
- 丹羽 崇史：中華人民共和国/09.12.2～12.9/平成21年度秋期特別展の展示品検品・返却/運営費交付金
- 加藤 真二：中華人民共和国/09.12.2～12.10/平成21年度秋期特別展借用品の返却、平成22年度夏期企画展の調整/運営費交付金
- 大林 潤：カンボジア王国/09.12.6～12.12/アンコール文化遺産保護に関する研究協力/運営費交付金
- 成田 聖：カンボジア王国/09.12.6～12.12/アンコール文化遺産保護に関する研究協力/運営費交付金
- 石村 智：カンボジア王国/09.12.6～12.16/アンコール文化遺産保護に関する研究協力/運営費交付金
- 杉山 洋：カンボジア王国/09.12.6～12.21/アンコール文化遺産保護に関する研究協力/運営費交付金
- 鳥田 敏男：大韓民国/09.12.7～12.9/第1回韓・日・中の建築文化遺産保存国際シンポジウム出席/渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 清水 重敦：大韓民国/09.12.8～12.9/第1回韓・日・中の建築文化遺産保存国際シンポジウム出席/渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 田辺 征夫：カンボジア王国/09.12.12～12.16/アンコール文化遺産保護に関する研究協力/運営費交付金
- 森本 晋：カンボジア王国/09.12.12～12.16/アンコール文化遺産保護に関する研究協力/運営費交付金
- 次山 淳：中華人民共和国/09.12.12～12.23/中国河南省洛陽市における漢代～唐代の出土貨幣の調査/科研費
- 番 光：中華人民共和国/09.12.12～12.23/中国社会科学院考古研究所との共同研究/運営費交付金
- 渡邊 晃宏：大韓民国/09.12.13～12.18/日韓共同研究に伴う資料調査/渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 箱崎 和久：大韓民国/09.12.13～12.18/日韓共同研究に伴う資料調査/渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 浅野 啓介：大韓民国/09.12.13～12.18/日韓共同研究に伴う資料調査/渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 降幡 順子：大韓民国/09.12.17～12.20/韓国出土ガラスの調査、情報収集/科研費
- 牛嶋 茂：中華人民共和国/09.12.18～12.27/中国社会科学院考古研究所との共同研究/運営費交付金
- 箱崎 和久：ベトナム社会主義共和国/09.12.23～12.31/ベトナム国フエ省フクティック村の集落調査および類型調査/他機関負担
- 恵谷 浩子：ベトナム社会主義共和国/09.12.23～12.31/ベトナム国フエ省フクティック村の集落調査および類型調査/他機関負担
- 黒坂 貴裕：ベトナム社会主義共和国/09.12.23～12.31/ベトナム国フエ省フクティック村の集落調査および類型調査/他機関負担
- 井上 幸：中華人民共和国/09.12.27～12.31/木簡の字形分析による日本古代の異体字の基礎的研究のための資料収集/渡航費：科研費、滞在費：私費
- 森本 晋：カザフスタン共和国・ウズベキスタン共和国・キルギス共和国・タジキスタン共和国/10.1.7～1.22/ユネスコ・シルクロード世界遺産登録関連ドキュメンテーション事業のミッション形成調査に参加/運営費交付金
- 杉山 洋：カンボジア王国/10.1.10～1.17/アンコール文化遺産保護に関する研究協力/運営費交付金
- 小野 健吉：タイ王国/10.1.14～1.19/スコータイ遺跡とアユタヤ遺跡の水景等に関する調査/他機関負担
- 石村 智：台湾・パラオ共和国/10.1.17～1.24/日本統治時代の遺構の調査およびパラオにおける戦争遺跡の調査/高梨学術奨励基金
- 小田 裕樹：大韓民国/10.1.18～3.5/国立慶州文化財研究所との発掘調査への参加/渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 丹羽 崇史：中華人民共和国/10.1.23～2.4/鑄造関連遺物の資料調査/科研費
- 石村 智：トンガ王国・ニュー・ジーランド/10.2.11～2.25/①トンガ王国における考古学的調査、②オークランド博物館およびオークランド大学において海洋文化に関する資料収集/①他機関負担、②科研費
- 森先 一貴：ロシア連邦/10.2.15～2.22/ロシア極東クニャーゼ=ヴォルコンスコエ遺跡出土資料調査/他機関科研費
- 清水 重敦：ドイツ連邦共和国/10.2.16～2.22/独立行政法人日本学術振興会ボン研究連絡センター主催コロキウム「世界遺

産の将来」へ出席／先方負担

●島田 敏男：カンボジア王国／10.2.19～2.25／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金

●大林 潤：カンボジア王国／10.2.19～2.25／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金

●高橋 知奈津：カンボジア王国／10.2.19～2.25／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金

●杉山 洋：カンボジア王国／10.2.19～3.5／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金

●馬場 基：大韓民国／10.2.22～2.26／日韓共同研究に基づく調査／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

●林 正憲：大韓民国／10.2.22～2.28／日韓共同研究に基づく調査／運営費交付金

●深澤 芳樹：大韓民国／10.2.25～2.27／発掘調査交流の実施状況に関する視察および協議／運営費交付金

●次山 淳：大韓民国／10.2.25～2.27／発掘調査交流の実施状況に関する視察および協議／運営費交付金

●木村 理恵：大韓民国／10.2.25～2.27／発掘調査交流の実施状況に関する視察および協議／運営費交付金

●恵谷 浩子：フィリピン共和国／10.2.26～3.4／「フィリピン・コリディエーラの棚田群」の文化的景観調査／他機関負担

●井上 和人：中華人民共和国／10.3.7～3.10／西安曲江大明宮遺址区保護改造辦公室との共同研究についての協議／運営費交付金

●小野 健吉：中華人民共和国／10.3.7～3.10／西安曲江大明宮遺址区保護改造辦公室との共同研究についての協議／運営費交付金

●今井 晃樹：中華人民共和国／10.3.7～3.10／西安曲江大明宮遺址区保護改造辦公室との共同研究についての協議／運営費交付金

●高妻 洋成：ベトナム社会主義共和国／10.3.7～3.10／タンロン皇城遺跡保存に関する協議／他機関負担

●脇谷 草一郎：ベトナム社会主義共和国／10.3.7～3.10／タンロン皇城遺跡保存に関する協議／他機関負担

●小池 伸彦：中華人民共和国／10.3.9～3.16／遼寧省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●牛嶋 茂：中華人民共和国／10.3.9～3.16／遼寧省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●豊島 直博：中華人民共和国／10.3.9～3.16／遼寧省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●芝 康次郎：中華人民共和国／10.3.9～3.16／遼寧省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●深澤 芳樹：中華人民共和国／10.3.10～3.12／環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究のための調査／他機関負担

●森本 晋：フランス共和国／10.3.10～3.16／古建築におけるリントル装飾に関する資料調査／運営費交付金

●松井 章：ラオス人民民主共和国／10.3.11～3.21／ラオスにおける家畜、家禽の調査／科研費

●鈴木 智大：中華人民共和国／10.3.12～3.21／中華人民共和国福建省の古代建築調査／科研費

●金田 明大：中華人民共和国／10.3.13～3.16／遼寧省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●加藤 真二：中華人民共和国／10.3.22～3.28／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●森先 一貴：中華人民共和国／10.3.22～3.28／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●森川 実：中華人民共和国／10.3.22～3.28／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●若杉 智宏：中華人民共和国／10.3.22～3.28／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●木村 理恵：中華人民共和国／10.3.22～3.28／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金

●石村 智：ドイツ連邦共和国／10.3.24～3.31／第8回パーミヤーン遺跡保存専門家会議に出席／運営費交付金

公開講演会

第104回公開講演会

2009年5月23日

◆田辺所長 ミニ講演：第一次大極殿院広場の復原

◆小田 裕樹：古代火葬墓の世界

日本古代の火葬は『続日本紀』によると、文武4年(700)の僧道昭の火葬記事をはじめとして、8世紀初頭に天皇・貴族層に受容され、官人層や地方へ波及したものと考えられている。本講演では、このうち大和盆地周辺火葬墓について事例紹介をおこない、喪葬令を根拠とする藤原京・平城京の葬送地に造られた貴族層の火葬墓と、古墳時代以来の伝統的な墓地の中に造られた在地氏族層の火葬墓とが存在し、両者には立地や墓の構造に差異があることを述べた。

また、韓半島をはじめとする東アジアの火葬墓の事例を紹介し、日本古代の火葬の系譜について私見を述べた。火葬は中国(唐)から遣唐僧を通じて、律令制度・仏教思想など先進的の制度・思想の一つとして日本・新羅の支配者層へ伝えられた可能性が高く、日本・新羅国内における火葬墓の造営の際には、両国の国内状況や墓に対する意識の違いに影響されて、独自の骨蔵器の創出や墓構造の選択がおこなわれていた可能性が高いと考えた。

◆黒坂 貴裕：高床式建物を探る－出土建築部材と雲南の実際－

各地の遺跡で復元されながら、まだまだ謎の多い先史時代の高床式建物について、絵画資料、国内の民家建築、海外の民族建築、出土建築部材を紹介しながら、その実態を考察した。

復元建物では現代の公共建築物として、耐震性・耐久性を求められ、復元図面よりも太い部材を使わざるを得ない。したがって、我々がイメージするよりも、もっと細い柱を用いた線の細い建物である。茅葺屋根も当時は穂先を下に向けた逆葺きで、毎年のメンテナンスをおこなっていた可能性があるものの、現代では耐久性が求められ、穂先を上に向ける真葺きが採用されやすい。仮に逆葺きであったとすれば、迫力有る屋根というよりも、柔らかい印象の屋根であったと考えられる。

各地の遺跡から報告例が蓄積してきた出土建築部材は、これからの復元においてその精度を上げる貴重な遺物である。これらを通じて、高床を支持する方法や軸組の方法、掘立柱建物と礎石建物の違いについて、整理できるようになってきている。また、建物自体の構造にとどまらず、製材と運搬の方法の実態も見えてきており、雪国では樫

を用いていること、陸上では伊勢神宮御木曳きに用いる土樋の類似品が出土していることを報告した。

第105回公開講演会

2009年11月28日

◆田辺所長 ミニ講演：これからの平城宮跡—遷都1300年を迎えて—

◆井上 和人：平城京遷都の歴史的背景—日本古代都城の出現と変質—

わが国の都城は、663年直後、後飛鳥岡本宮をめぐる飛鳥の丘陵の尾根筋に添って羅城と目すべき長大な閉塞施設が造設されたことをもって出現した。この事態は、いうまでもなく、朝鮮半島において唐が新羅と連合して百済を攻撃し滅亡させたことに直接関わる。飛鳥での王宮の造営は、さらに先立つ630年の舒明政権による飛鳥岡本宮に始まる。以後、天武朝にいたるまで飛鳥正宮は狭隘な飛鳥の奥まった地点で同位置での造営が繰り返される。飛鳥岡本宮以前の大王宮は代わりごとに新たに別の場所に造営されていたが、630年を契機にして、この大王家（天皇家）の永い歴代遷宮という伝統が途絶することになる。

630年および663年直後のわが国における王宮のありようの原因は、いずれも大陸における中華帝国の動勢の求められる。隋そして唐は中国大陸を平定統一するや、四囲の国々に対する征服戦争を展開する。これは華夷統治思想に基づく政治的行為であり、周辺諸国家、諸民俗集団は隋唐からの攻撃を受けた場合、服従か滅亡かの危機的選択を迫られた。こうした歴史状況にうながされた結果が飛鳥への王宮の遷移と固定化という事態であった。

以後、天武政権により、直前の天智政権のとった列島防備施設構築策とはまったく別の方向性がとられる。そして中央集権国家体制を構築する施策に基づいた、唐の都城をしのぐ理想的な首都・藤原京の建設が遂行される。しかし、完成した藤原京が当時の世界標準であった唐長安に比べあまりにも都城としての要件を欠くという認識が生じ、長安を強く志向した新たな都城・平城京の建設が強行されたのである。

◆今井 晃樹：世界都市長安城の風景—平城京の原型—

隋唐長安城の遺跡は現在の中国陝西省西安市にあり、日本の藤原京、平城京のモデルとなっていたとされる。講演では、隋唐長安城に関する調査と研究について紹介した。

中国の城とは、都市を意味し、城壁に囲まれた範囲は巨大である。当時の首都であった長安城は東西9.7km、南北8.6kmの範囲を高さ約5mの城壁で囲み、城内には東西南北に通りがもうけられ、棋盤目状を呈していた。なかでも、城内の南北中心軸をとる朱雀大街は幅155mもある道路で、現在の世界にあるどの通りよりもおおきい。そのほか、発掘調査や文献の研究であきらかになった当時の都市の風景を紹介した。

研究集会

◆東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会

2009年5月19日～21日

奈良文化財研究所では、2001年度以来、『古代庭園に関する調査研究』に取り組んでいる。現在、第Ⅱ期として平安時代（8世紀末～12世紀末）を中心とした庭園を検討対象としており、宮廷の庭園、貴族邸宅の庭園などについて検討してきた。

平安時代の庭園を検討する上で、残された検討課題のうちでも、日本において10世紀から14世紀にかけて特異的に造営された「浄土庭園」の本質を見極めることが特に重要であり、また、その代表的な事例である平等院庭園が世界文化遺産にも登録されていることから、2009年度においては、文化庁と協力・連携して「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」を開催した。この研究会では、「浄土庭園」の本質について広い観点から検討するため、日本国内のみならず中国・韓国からも庭園史・建築史の専門家の参加を得て、東アジアにおける理想郷と庭園の系譜や特質を検討し、それぞれの事例の比較研究を通じて、日本の「浄土庭園」の本質、あるいは、その極めて重要な到達点を示しているといえる「平泉の浄土庭園群」の世界的見地からの評価などについて検討をおこなった。

（平澤 毅）

◆遺跡GIS研究会

2009年11月20日

1995年度から継続している研究会で地理情報システム（GIS）の現状や考古学への応用に関する研究発表の場として今年度は第14回目を迎えた。研究発表は、津村宏臣「敦煌石窟壁画データアーカイブへのGISの応用 写真データの一括管理と画像解析」、寺村裕史「地球研・インダスプロジェクトにおけるGIS利用について インド Kanmer・Farmana両遺跡における実践例」、森本晋「遺跡の記録」、赤塚次郎・堀木真美子「遺跡データWeb整理システムの提案」の4本である。遺跡分布などの分析にGISが欠かせないものとなりつつあるとともに、位置情報で様々な情報を統合して分析するという視点を、より小さな範囲に適用していく研究が進展していることが明らかになった。

（森本 晋）

◆文化的景観研究集会（第1回）

2009年12月18日～19日

文化遺産部景観研究室では、2004年の文化財保護法改正により新設された文化的景観につき、概念の共通理解を得るとともに、保護行政に資する目的で、2008年度より継続的に文化的景観研究集会を開催している。2009年度は、第2回として、「生きたものとしての文化的景観—変化のシステムをいかに読むか—」を主題に、変化を前提とする文化的景観の価値評価のあり方についての議論をおこなった。

第1日目は「文化的景観における変化のシステム」をテーマに、各地の事例を含む文化的景観の本質が論じられた。そこでは、変化しながらも要素相互の関係性においてある種の安定したシステムが保たれる様子が描き出された。第2日目は、「文化的景観における有形と無形の間」をテーマに、有形・無形それぞれの要素における景観の形成と読解方法、あるいは有形と無形の関係性につき、豊富な事例の提示とともに論じられた。

保護制度としての文化的景観は、保護ないし整備活用の対象が主に有形要素となっており、ともすればモノの保存に力点を置きがちである。しかし、文化的景観は、それぞれに変化を内包するモノとコトとが、相互に関連を持ちながら、まとまりを保ち続けるものである。モノとコトとのバランスを、いかに現状の保護制度によって担保していくのか。今回の研究集会の議論は、この問題点の提出に、結論を集約できる。

（清水 重敦）

◆古代官衙・集落研究会（第13回）

2009年12月11～12日

本研究会は2009年度より、新たな体制で事務局を組織し、「官衙と門」をテーマに研究集会を開催した。考古学・文献史学・建築史学の諸分野から門の規模・構造と機能、時代差・地域差についての検討をおこなった。

研究報告は、青木敬「飛鳥・藤原地域における7世紀の門遺構」、村田晃一「奥羽の城柵・官衙と門」、宮田浩之「西海道の門」、清水重敦「都城・官衙における門の建築」、山下信一郎「文献からみた古代官衙の門の機能」、井上和人「都城における門」、坂井秀弥「地方官衙と門」、田中広明「居宅・館・集落と門」の8本である。総合討議では、門遺構の認定や格式、機能についての議論が交わされた。

参加者は地方公共団体・大学関係者等135名で、アンケートでは98%が有意義であったと回答が得られた。この研究会の報告論文集は2010年度に刊行する予定である。（小田 裕樹）

◆遺跡整備・活用研究集会（第4回）

2010年1月28日～29日

奈良文化財研究所では、平成18年度から毎年、文化遺産部遺跡整備研究室が「遺跡整備・活用研究集会」を企画・実施している。本年度においては、『遺跡内外の環境と景観～遺跡整備と地域づくり～』を全体テーマとした。

基調講演では《遺跡の保護と計画》を主題の下に、「環境・景観から遺跡整備を考える」、「遺跡整備と地域計画」の2つが講演された。事例報告では、『遺跡の環境と復元』の主題の下に「三内丸山遺跡の環境と景観」、「赤穂城跡と旧赤穂城庭園の保存と活用」、「足利市における文化遺産の保護活用」、《遺跡の景観と保全》の主題の下に「石見銀山遺跡とその文化的景観の保全」、「萩市の文化遺産が織りなす景観とその保全」の計5つの報告がなされ、遺跡における環境の復元や景観の保全について、特に地域づくりとの関わりから、近年のさまざまな取組が紹介された。

総合討議では、講演・報告者をパネラーとして、会場参加者から提出された質問票に基づき、「遺跡整備における復元」、「遺跡を通じて実施する地域活性化を目的としたプログラム」、「遺跡整備を地域づくりへ繋げること」、「総合的取組のための計画と体制」などについて検討した。

（平澤 毅）

◆保存科学研究集会

2010年3月4～5日

例年、奈良文化財研究所において開催している保存科学研究集会を本年度は九州国立博物館を会場として、3月4日と5日の2日間にわたり、「遺構・遺物の保存と展示・活用の諸問題」をテーマに開催した（九州国立博物館と共催）。

今回の研究集会では、装飾古墳をはじめとする遺跡の保存に関する問題、現在おこなわれている遺物の保存処理の現状と課題、博物館における展示・活用の新たな取り組みと課題などについて、基調講演2件、研究報告22件（内、ポスターによる報告12件）がおこなわれた。

総合討議では、遺跡の保存については遺構露出展示における土壌水分の問題、鉄製品および有機質遺物の保存処理の課題と基礎研究の必要性、博物館における展示品の三次元データの取得と展示への活用、博物館の展示環境への新たな取り組みなど、幅広く意見が出され、文化財の保存・展示・活用に関する問題点の共有化をおこなうことができたことは、今後の文化財保存の取り組みにおいて意義深いものである。参加者数は各日ともに約110名（延べ220名）であった。（高妻 洋成）

科学研究費等

◆木簡など出土文字資料積読支援システムの高次化と総合的研究拠点データベースの構築

代表者・渡辺 晃宏 基盤研究（S）継続

木簡の文字画像データベース「木簡字典」の高次化と知識ベースの充実により木簡研究の拠点機能の構築を図る研究の第2年度である。

木簡解読支援システムでは、Mokkanshopの字体検索に使う知識情報（テンプレート）を追加し、欠損情報の補完技術を改善した。また、「Mokkanshop」の商標登録をおこなった。

研究拠点データベースでは、2009年5月29日に東京大学史料編纂所とデータベース連携に関する覚書を交換し、木簡の文字画像データベース「木簡字典」と東京大学史料編纂所の「電子くずし字字典データベース」との連携検索システムの開発をおこなった。2009年10月14日に公開を実現した。これにより、機関の枠を超えた画期的な連携が実現し、1000年以上の字形の変化をカバーする検索が可能になった。また、『平城宮木簡』『平城京木簡』の解説に基づく知識

ベースの入力を終え、公開の準備を整えた。

◆遺跡出土の建築部材に関する総合的研究
代表者・島田 敏男 基盤研究（A）継続

2009年度は4ヶ年計画の最終年であり、全国出土建築部材のデータベースを完成させた。また、調査手法の検討をおこなうとともに、飛鳥・藤原地区出土の出土建築部材および静岡県伊豆国市山木遺跡出土の建築部材を調査した。これまで4年間の研究成果を研究成果報告書として刊行するとともに、出土建築部材の調査マニュアル兼事例集を「出土建築部材における調査手法についての研究報告」として刊行した。

◆東アジアにおける家畜の伝播とその展開に関する動物考古学的研究

代表者・松井 章 基盤研究（A）継続

2005年に財三江水文化財研究院（旧：慶南考古学研究院）が発掘を行った金海会峴里貝塚の調査に参加して以来、骨角器や動物遺存体の整理、分析をすすめ、環境考古学各分野の分析のとりまとめを行ってきたが、その報告書が刊行された（三江水文化財研究院編『金海会峴里貝塚』）。3月にはラオス北部の山岳少数民族、タイルー族のククナン村に民泊し、焼畑と野生動物、家畜・家禽の関係についての民族考古学調査を行い、在来のニワトリ、アヒル、ガチョウ、ニワトリの野生原種であるセキショクヤケイ、イノシシなどの現生骨格標本を作成することができた。

◆ミリ波およびテラヘルツ波を用いた文化財の新たな非破壊診断技術の開発

代表者・高妻 洋成 基盤研究（A）新規

本研究は、テラヘルツ波とミリ波を利用した新たな非破壊非接触の分析調査技術を文化財の調査・研究・保存に応用するための開発的な研究をおこなうことを目的としている。本年度は、壁画や板絵等に対するテラヘルツ波イメージング技術の応用のための基礎実験、文化財の現地調査用携帯型ミリ波イメージング装置の試作ならびにテラヘルツ波分光分析装置の導入をおこなうとともに、フィールドにおける試験的な調査をおこなった。

◆大極殿院の思想と文化に関する研究

代表者・今井 晃樹 基盤研究（B）継続

上記の課題で、2006年度から2009年度まで調査研究を実施した。平成22年度に完成した平城宮大極殿およびその院について、さまざまな角度から研究をおこなった。大極殿院がどのような思想で造営されたのか、

現代の我々はその思想をうけてどのように整備、活用していけばよいのかを、テーマに掲げ多くの成果を発表した。これらの成果は、『大極殿院の思想と文化に関する研究』2006年度から2009年度科学研究費補助金研究成果報告書にまとめた。

◆マイクロフォーカスX線CTを用いた非破壊年輪年代法による木彫神像の研究

代表者・大河内 隆之 基盤研究 (B) 継続

本研究は、マイクロフォーカスX線CTを用いて調査対象の断面画像を撮影し、得られた画像をもとに非破壊で年輪年代測定する技術を木造神像彫刻の調査に応用するものである。2009年度は、滋賀・金勝寺僧形神坐像(2軀・栗東歴史民俗博物館寄託)、奈良・玉龍寺女神坐像(滋賀県立安土城考古博物館寄託)、滋賀・本隆寺僧形男神坐像(県指定文化財)、大阪・大門寺蔵王権現立像(3軀)などを奈良文化財研究所へ美術輸送し、同法による非破壊年輪年代調査を実施した。

◆日本初期貨幣史の再構築

代表者・次山 淳 基盤研究 (B) 継続

出土銭貨をもとに、わが国の貨幣の誕生と貨幣制度の確立過程の解明を目的とした研究。3カ年計画の2年目となる2009年度は、人事異動に伴い研究代表者を変更した。昨年度に引き続き集成資料の分析を進めるとともに、経済史・法制史的側面から銀・銅・穀などの物品貨幣の使用法と貨幣的価値を考究した。また、研究集会の一環として和同銀銭の鑄造実験を行い、前年度の研究集会の記録集「出土銭貨研究の課題と展望」を刊行した。あわせて、中国河南省洛陽市において漢魏洛陽城出土銭貨の調査を実施している。

◆南部における廃仏毀釈後の資料動態に関する調査研究

代表者・吉川 聡 基盤研究 (B) 新規

南都の古寺社が所蔵してきた歴史資料について、本来伝来した場所から移動した状態で現在保管されている資料群の性格を追求する。2009年度までの計画だったが、2013年度までの延長が認められた。そこで2009年度も新修東大寺文書聖教の調査を継続し、中村準一寄贈文書の幕末期の日記翻刻や、元来東大寺に伝来したと思われる資料群の調査等を実施した。東大寺伝来資料も、様々な寺内組織で保管された資料が累積されているのが現在の姿であり、それらの性格は今後検討すべき課題である。

◆蓄積型自然放射線量とX線分析による古代ガラス・セラミックス材質の考古学的研究

代表者・降幡 順子 基盤研究 (C) 継続

2009年度までに実施した調査研究資料約5250点について、化学組成および色調、形状などの観察・分析結果を基にして資料のデータベース化を進め、考古学的、産業・技術史的な知見について考察をおこなった。その際、特徴的な資料については、着色材料である遷移金属や微量成分元素に着目した分析結果から、資料群、遺跡群、および地域的な特性を明確にし、材質の変遷などに関する知見を得ることができた。

◆文化的資産としての名勝地の概念とその適用に関する基礎的研究

代表者・平澤 毅 基盤研究 (C) 継続

本研究は、記念物の一類型である「名勝地」について、その概念の具体的資産への適用と保護に関する総括的資料の取りまとめを含む基礎的な検討をおこなってきた。今年度は、研究計画の最終年度として、中国・韓国等の名勝地に関する検討を行うとともに、最終成果として『文化的資産としての名勝地』を刊行した。

◆青銅製祭器の生産と流通からみた弥生時代の社会変化の研究

代表者・難波 洋三 基盤研究 (C) 継続

2009年度の研究により、鑄型の材質を推定する上で青銅中の気泡の多寡の検討が有効であることが判明した。石型製の銅鐸、石型製の祭器化した北部九州製銅戈・銅矛は気泡を多く含むが、土型製の大阪湾型銅戈b類は気泡をほぼ含まない。土型製の銅鐸も気泡をあまり含まない。青銅中の気泡の多寡は主に鑄型の通気性と冷却能の差異と関係するが、青銅の組成、製品の大きさや形状、鑄込み時の各種条件の差異も関係すると考える。この気泡の多寡に着目することで、これまで鑄型の材質が不明であった、平形銅剣はほとんどが石型製、大阪湾型銅戈a類は石型製、と推定できた。この種の気泡には熔銅の流れに沿って長円形となったものが目立ち、これを分析して熔銅の流れを復原することも可能である。

◆古代の鉛調整加工技術に関する考古学的研究

代表者・小池 伸彦 基盤研究 (C) 継続

本研究は、古代の中央官営工房における鉛調整・加工技術について究明することを目的とする。平成21年度は主として平城宮東方基幹排水路SD2700出土冶金関連遺物の

再検討を実施した。その結果、板状熔結鉛銅を抽出でき、蛍光X線分析により鉄を含む銅鉛合金であることが判明した。また、湾曲羽口を検出し飛鳥池工房出土羽口との系譜関係について分析を進めた。

◆中国産木材の顕微鏡的特徴に関するデータベースの構築

代表者・伊東 隆夫 基盤研究 (C) 継続

中国産木材の有用材のみならず低木、つる性植物など多様な樹種1000種につき、これまで記載や写真記録のなかった顕微鏡的特徴を総合的に調べるとともに精度の高い顕微鏡写真を撮影して写真記録をとり、木材学のみならず、森林文化学、考古学、美術史学など幅広い分野および本データを必要とする他の方々への利用に供するため、本研究課題では中国産木材の顕微鏡的特徴に関するデータベースを構築することを目的としている。

本年度は南京林業大学の潘 彪教授、駱嘉言副教授の2人の中国人協力者を招聘し、それぞれ樹種別に109種、116種の顕微鏡的記載をおこなった。

◆古代律令国家の官衙と寺院の占地に関する比較研究

代表者・小澤 毅 基盤研究 (C) 新規

本研究は、日本の古代律令国家における官衙と寺院がいかなる場所に造営され、占地上、どのような関係を有していたかを検討し、立地面での特性を探るとともに、それが果たした政治的な役割を解明することを目的としている。初年度にあたる本年度は、藤原京以後の都城のほか、畿内および西海道・東海道・東山道諸国の官衙・寺院遺跡を対象として、資料の収集を開始した。

◆発掘調査成果の総合的な機械可読化に関する研究

代表者・森本 晋 基盤研究 (C) 新規

発掘調査の記録には、遺構図、遺構写真、文章記述などがある。近年記録のデジタル化が進み、当初よりデジタルデータしか存在しない記録も現れている。調査記録の統合的分析のためには各種デジタルデータを統一的に扱う必要があり、記録の構造やフォーマットに関する検討が求められる。本年度は従来の遺構図の表現要素について事例収集を行い分析した。

◆古代都城儀式的歴史の変遷にかんする研究

代表者・山本 崇 若手研究 (B) 継続

本申請研究は、古代都城の中枢に位置す

る大極殿とそこで行われる儀式の変遷を、成立から終焉段階までを対象として再検討せんとするものである。最終年度の成果として、平安宮第二次大極殿が竣工した元慶3年(879)10月以降、史料上最後の朝賀となる正暦4年(993)正月までの史料を『大極殿関係史料(稿)(三)編年史料之二』(稿本)にまとめる作業をすすめたほか、大極殿院出土木簡を『平城宮木簡七』として刊行し、平城宮の宮殿と大極殿にかかわる論考を発表した。

◆縄文時代における、縄文原体からみた社会構造変化

代表者・石田 由紀子 若手研究(B)継続

2009年度は、島根県・鳥取県の縄文遺跡において縄文原体の実見・計測およびデータ収集をおこなった。調査の結果、縄文の撚りに関して鳥取県では、後期初頭中津式以降圧倒的にRLが優勢になり、瀬戸内・近畿地方との共通性が見いだせる一方で、島根県では、中津式になっても比較的LRが安定した比率を占めることが確認できた。ただし、福田KⅡ式以降は他地域と同じくRL圧倒優勢となる。このことは、福田KⅡ式以降における島根県の土器様相の独自性を考える上でも有効な知見を得られた。

◆木簡の構文・文字表記パターンの解析・抽出研究

代表者・馬場 基 若手研究(B)継続

平城宮・京出土木簡へのタグ付け作業を行い、既刊の平城宮・京木簡のタグ付け作業を終了した(木簡約15000点を確認)。また、全体を通してのタグの見直し・確認作業も進め、修正を行ったほか、入力作業も進めた。そのほか、木簡に関する知識のDB化なども平行して行った。

◆弥生・古墳時代における東アジア墳墓出土鉄製武器の比較研究

代表者・豊島 直博 若手研究(B)継続

本研究は、日本の弥生・古墳時代の墳墓から出土する鉄製武器の起源を探るため、中国と朝鮮半島の武器と比較することを目的とする。今年度は研究の2年目に当たり、引き続き発掘調査報告書をもとに中国と朝鮮半島の武器を集成した。

実物資料の観察は、古墳時代後期の西日本出土資料を中心におこなった。また、これまでの研究成果を『鉄製武器の流通と初期国家形成』(研究論集16・奈良文化財研究所学報第83冊)にまとめた。

◆古代工房の復元的比較研究—埴輪・須恵

器・瓦の工房を中心に—

代表者・城倉 正祥 若手研究(B)継続

本研究は、工具痕分析を武器として埴輪・須恵器・瓦の工房を具体的に復原し、古墳社会から律令国家成立に向けての主工業生産の発展を通時的に位置づけることを目的とする。今年度は関東地方の埴輪窯を中心に分析を進めるとともに、7・8世紀の須恵器・瓦の関係論文を収集した。今年度の成果の一部は、論文として「比企の埴輪」『埴輪研究会誌』第14号に掲載した。

◆古代中世東アジアにおける八角塔・八角堂の構造と意匠に関する研究

代表者・箱崎 和久 若手研究(B)継続

2009年度は中国内蒙古自治区・遼寧省に残る遼代の八角塔を中心に現地調査をおこなった。遼代特有の詰組で各辺から45度をなす角度に挺出する斜椽に関連して、興味深い知見を得た。すなわち、内蒙古では八角隅の組物を斜椽と平行させる場合があり、隅肘木が柱上で折れる構造がみられる。磚造ならではの構造とみられるが、遼寧省にはなく斜椽を用いる他の地域での様相に関心が深まった。

◆近世建造物の年代測定を目指した日本産ツガ属の年輪年代学的研究

代表者・藤井 裕之 若手研究(B)継続

現生木を中心に、引き続き資料収集とデータの分析を進めた。その結果、ツガについても一定の地理的範囲において年輪パターンの共通性を把握でき、将来ヒノキやスギなどと同様に年輪年代法を適用しうることが確認できた。また、屋久島産の材をもとに現在から約400年分の基準パターンを得ている。今後、暦年標準パターン設定の足掛かりになることが期待される。上記の成果は日本文化財科学会で報告した。

◆南都諸大寺の中世寺院への転成過程に関する建築史学的研究

代表者・大林 潤 若手研究(B)継続

本研究は、平城京の諸大寺が中世南都の諸寺院へと変遷していく過程を検討するため、主に伽藍配置や建築の性格を対象に、建築史学的方法と、発掘調査による知見、文献史料の検討をおこなうことを課題とする。本年度は昨年度に引き続き南都寺院の発掘調査資料を収集し、随時データベース化作業をおこなった。また、寺院毎の遺構図の集成作業をおこなった。

◆近代日本における洋風庭園の様式形成過程と空間デザインに関する研究

代表者・栗野 隆 若手研究(B)継続

2009年度は、近代に刊行された造園・建築・園芸関連雑誌、絵葉書、写真帖などの資料の整理をおこない、洋風庭園の様式形成過程を通史的な分析・考察を実施した。また、そのなかでも和洋併置式庭園の代表例である旧古河庭園の構成・意匠に関する特徴整理をおこなった。以上の成果は、「日本庭園学会誌」等の学術雑誌で公表をおこなった。

◆人骨に認められる刑罰痕の研究—打ち首・さらし首を例として—

代表者・橋本 裕子 若手研究(B)新規

2009年度は鎌倉時代と室町時代の頭蓋骨に刀傷のあるものについてデータ収集を行った。打ち首以外の刀傷についても併せてデータを収集した。その中で、兵庫県出石町の宮内堀脇遺跡出土人骨(室町時代)は大腿骨に刀傷、また脛骨は骨梅毒に感染している症例が認められた。これまで梅毒の症例は日本で最も古い例として1512年の文献資料があるが、梅毒に感染した人骨の症例は江戸時代以降の遺跡からしか発見されていなかった。本遺跡出土人骨は位牌などの遺物から室町時代の天文年間(1550年代)と推定されており、現在のところ日本最古の梅毒感染の人骨であることが判明した。成果はイギリス形質人類学会(古病理学セッション)、日本人類学会で報告した。

◆造瓦からみた6~8世紀の日朝交渉

代表者・高田 貫太 若手研究(B)新規

本研究は、瓦を通してみた6~8世紀代における日朝交渉、特に新羅との関係を検討する。今年度は、新羅の中央たる慶州地域の古代寺院の瓦資料を集成し、日本列島の渡来系寺院の軒瓦も網羅的に集成することに努めた。また、飛鳥地域各寺院の非主流的な軒丸瓦の系譜関係について検討を加えたが、少なからず新羅的要素が見て取れそうである。特に、宇治市隼上り窯産の軒丸瓦や飛鳥寺東南禅院所用と推定される軒丸瓦は、造瓦における新羅との交流関係を具体的に浮き彫りにする糸口となりそうである。

◆オセアニア島嶼環境へのラビタ人の適応戦略を探る先史学的研究

代表者・石村 智 若手研究(B)新規

島嶼環境というのは限定された空間であり、ヒトが定住するための適応戦略には一定の条件があると考えられる。本研究では、特にサブシステムの側面から、動物および植物の資源利用、遺跡立地などの点につい

て検討をおこなうものとする。

平成21年度では、特に植物利用の点について、現在の伝統的集落における資源分布および利用実態を明らかにすべく、トンガ王国のハアバイ島で現地調査をおこなった。

◆古代日韓における土木技術の系譜にかんする考古学的研究

代表者・青木 敬 若手研究 (B) 新規

本研究は、6・7世紀における古墳・寺院・都城などの大規模土木構造物の築造技術について、日韓双方の調査事例を精査し、比較検討をおこなう。2009年度は研究の初年度にあたり、発掘調査報告書をもとに日韓双方の事例収集を開始した。また、門遺構を中心に都城等の建物事例からみた分析を第13回古代官衙・集落研究会で口頭発表し、寺院の雨落溝の構造と変遷について『奈文研紀要2010』にて紙上発表した。

◆東アジアにおける矢蠟法の出現と展開に関する考古学的研究

代表者・丹羽 崇史 若手研究 (B) 新規

本研究は、主に考古遺物の調査から東アジアにおける矢蠟法技術の出現・展開過程を解明することを目的とする。

2009年度は、中国ならびに日本における矢蠟法関連遺物および鑄造関連遺物の集成をおこなうとともに、中華人民共和国北京市・河南省・湖北省・上海市にて関連遺物を調査し、当該分野の研究者とも意見交換をおこなった。また、奈文研や大阪府文化財センターが所蔵する鑄造関連遺物を調査し、その成果の一部を日本鉄鋼協会社会鉄鋼部会「鉄の歴史-その技術と文化-」フォーラム2009年度秋季講演大会(9月16日京都大学)にて報告した。

◆古代東アジアにおける都城と葬送地に関する考古学的研究

代表者・小田 裕樹 若手研究 (B) 新規

本研究は、古代都城の成立と共に設置されたと考えられる都城の「葬送地」の実態について考古学的に明らかにすることを目的とする。

研究初年度にあたり、中国・韓国を中心に都城周辺の墳墓資料の集成作業をおこなった。また、韓国において新羅王京周辺の墳墓資料の実見調査と、研究成果の一部についての口頭発表をおこなった。

◆校倉造りの歴史的変遷と地域特性に関する研究

代表者・黒坂 貴裕 若手研究 (B) 新規

本研究は、古代の遺跡から出土した校倉造りの建築部材について、板校倉の構法について、民家建築における校倉造りの地域特性、近代建築技術書にみる校倉造りについて、以上の研究を通じて、古代から近代までの校倉造りの構法について整理することを目的としている。2009年度は既存の古代校倉造り建物の修理工事報告書をもとに、校木の木取りについての分析に向けた準備作業をおこなった。

◆復元設計を方法とする東アジア古代建築の空間及び造形原理の解明

代表者・清水 重敦 若手研究 (B) 新規

本研究は、発掘遺構の復元設計を古代建築理解の方法と位置付け、東アジア古代建築の空間・造形原理を解明することを目的とする。今年度は、新薬師寺旧境内で発掘された想定七仏薬師金堂の復元設計と、都城・官衙の門の復元検討をおこない、階段や柱間装置、内部空間の意義を問直した。また、中国の古代建築遺構、特に方3間仏堂を現地調査し、日本の古代建築との関連を考察した。

◆中世日本と中国における木造建築の架構システムに関する比較研究

代表者・鈴木 智大 若手研究 (B) 新規

本研究は、木造建築の架構システムに着目し、日本と中国の比較をおこなうことで、両国、さらには東アジアにおける木造建築の技術およびその設計論理を解明しようとするものである。初年度は、古建築の修理・調査の公開が加速している中国の資料を中心に、図面の収集および整理をおこなった。また中世日本にもたらされた新技術のルーツと指摘される中国福建省の古建築調査をおこなった。

◆動物遺存体に残された解体痕跡の基礎的研究

代表者・山崎 健 若手研究 (スタートアップ) 継続

2009年度研究は、動物遺存体に残された痕跡から、利用目的や解体方法という動物資源利用の実態を論じていくことを目的とする。

2009年度は、モンゴルにおいて民族考古学調査を行い、「動物資源利用に関わる人間行動」と「動物遺存体が形成される過程」の対応関係を把握し、人間活動の結果として残された「痕跡」を動物考古学的方法で分析、記載した。成果の一部は動物考古学研究会で発表した。

◆更新世末期の社会変化の研究

代表者・国武 貞克 若手研究 (スタートアップ) 継続

本研究は、旧石器時代の移動生活を基本としたバンド社会から、縄文時代の定住生活を基本とした部族社会に至る社会変化を、居住形態の変化を追跡する視点から解明することを目的としている。本年は、関東地方の旧石器時代の主要な石材産地である栃木県高原山黒曜石原産地遺跡の発掘調査を行い、後期旧石器時代初頭に遡る石器群を検出することが出来た。この資料の整理作業と分析は今後の課題となった。また、昨年度検出した、縄文時代草創期の大型の槍先形尖頭器の製作址の資料を詳細に整理してこのデータをもとにして、更新世末期から完新世初頭にかけての資源獲得行動からみた社会変化についての論考を作成した。ほかに関東地方から近年出土した旧石器時代前半期の資料調査を実施し、これまで作成したモデルの検証を行った。

◆木簡の字形分析による日本古代の異体字の基礎的研究

代表者・井上 幸 若手研究 (スタートアップ) 新規

本研究の目的は、①日本古代の木簡の筆画のあり方の把握及びこれを生成する場、位相の分析による文字使用の実態把握と文字意識の分析、②①をふまえ、実態に即した異体字研究を再構築することにある。今年度は、主に、木簡資料の収集および中国の異体字研究関連の資料収集を行った。研究成果として、研究会での口頭発表と漢字の部分の位置交替による異体字についての論文を発表した。

◆東アジアにおける古本州島後期旧石器文化の特殊性とその形成過程の研究

代表者・森先 一貴 若手研究 (スタートアップ) 新規

最終氷期に形成された古本州島後期旧石器文化の、東アジア世界における特殊性及びその背景の解明が本研究の目的である。2009年度は大陸部東アジアとの接点となる古本州島東北端の東北地方および同西端の九州地方で新出資料を集中的に調査し、大陸部との編年対比の基準となる、古本州島編年の検証・補強に努めた。また、次年度に調査をおこなうロシア極東・韓国の比較対象資料を集成した。

◆東大寺の成立過程の研究

代表者・児島 大輔 特別研究員奨励費 新規

本研究は東大寺の成立過程を様々な角度から検討することを目的とする。本年度は

最終年にあたり、都城と大寺の関係を比較検討するため中国陝西省・隋唐長安城跡とその主要街路、城内寺院跡など国内外を踏査したほか、隋唐期仏教美術作品等の調査をおこなった。これらの成果として日本古代の銀仏の制作背景について学会で口頭発表し、正倉院宝物樹皮色裂装に関する論考を発表している。

◆目録学の構築と古典学の再生—天皇家・公家文庫の実態復原と伝統的知識体系の解明—

代表者・東京大学史料編纂所教授 田島 公(渡辺晃宏) 学術創成研究費 継続

研究支援ツールの充実の一つとして、『日本古代人名辞典』の増補・改訂のための「木簡人名データベース」の構築などを担当している。

本年度までで木簡人名データベースの入力を終え、別途開発している出土遺構年代観データベース、『平城宮木簡』『平城京木簡』などの報告書の解説に基づく知識データベースとともに、公開の準備を整えた。2010年度に原稿を整理・補完した上で、公開の実現を図る予定である。

◆「日本霊異記」の文献・書誌及び歴史地理的検討による古代社会像の再構築

代表者・立命館大学教授 本郷 真紹(山本 崇) 基盤研究(C) 新規

本申請研究は、九世紀初頭に成立した日本最古の仏教説話集である『日本霊異記』の全ての説話を対象に、文献学・書誌学的な知見を踏まえた分析と、現地調査に基づく歴史地理学・考古学的考察をおこなうことにより、古代社会の実態と構造を新たな観点から復元・再構築することを目的としている。初年度は上巻説話の検討をほぼ終えたほか、故地の現地調査をおこない、上巻注釈書刊行の準備をすすめた。

◆考古学と地下探査の協同による近世薩摩焼研究再構築のための基礎的研究

代表者・鹿児島大学教授 渡辺 芳郎(金田 明大) 基盤研究(C) 新規

本研究は近世薩摩焼研究に資する生産地の把握とその詳細なデータの取得を目的とする。対象として薩摩焼生産の中心地である美山苗代川窯の窯周辺の観察、測量、探査、発掘を予定している。本年度は踏査と予備的な探査によって窯の存在が想定されるB02地点について、磁気・地中レーダ・電気の各手法による探査を実施した。また、VRS-RTKGPSによる基準点の測量をおこない、調査の基準とした。

◆現代に生きる戦争の「遺跡」：パラオにおける戦争遺跡のパブリック・アーケオロジー

代表者・石村 智(財高梨学術奨励基金 新規)

本研究ではパラオにおける第二次世界大戦の戦争遺跡および日本統治時代の遺構の現状と実態を解明し、またそれらが現代社会に生きる地域住人の認識の中にいかに位置づけられているかを明らかにすることを目的とする。現地調査では、パラオ港内にて撃沈された海軍特務艦「石廊」および工作艦「明石」の潜水調査を実施し、またペリリュー島・コロール島・バベルダオブ島において踏査をおこなった。

学会・研究会等の活動

◆埋蔵文化財写真技術研究会

2009年7月3日～4日に第21回総会および研究会をおこなった。

7月3日：総会 参加者117名(含委任状)・講演 参加者52名 公開討論会「写真を取り巻く環境のいま」7月4日：参加者59名・発表 「白黒写真の今後への対策」(研究会白黒部会)

発表「デジタル入稿の落とし穴」(宮内康弘氏；岡村印刷工業)

公開講座「デジタル撮影の応用と実践」(玉内公一氏；ティーコア)

第21回の総会において、研究会名称の変更を審議、承認された。新しい研究会名称は「文化財写真技術研究会」である。今後は広く文化財に関わる写真分野の叢智を結集して活動をすすめていきたい。

一日目の公開討論は写真を取り巻く環境で特に文化財写真に関わる撮影技術と保存性について、各部会長やアドバイザーのパネリストを交えて討論をおこなった。今後とも「銀塩写真縮小・デジタル写真偏向」が加速することは周知の事態であり、避けて通ることの出来ない道である共通認識から、今後どのように文化財写真のデジタル化にのぞむかを討論した。

二日目は文化財写真担当者が抱える様々な問題や疑問に道筋を付ける発表をおこなった。白黒写真の保存性を担保する活用方法やデジタルでの撮影・印刷への対応など今後必要不可欠となる技術・知識について、専門家からの提言や公開講座をいただいた。

(中村 一郎)

◆日本遺跡学会

2009年度大会は、文化財石垣保存技術協議会との共催により、「近世城郭の保存とまち

づくり」をテーマとして、2009年11月28～29日にかけて姫路市で開催した。2日間にわたり記念講演や事例発表等をおこない、全国から約400名の参加者を得た。

初日は役員会・総会の後、2つの基調講演をいただいた。まず、渡辺武氏から「大阪城遺構の保存と活用について」、次に、本中真氏から「城と城下町を活かしたまちづくり—石垣保存技術の継承と新たなまちづくりの視点」と題してご講演いただいた。

2日目は、木越隆三氏から「石垣の伝統技術を探る」と題し基調講演をいただいた後、5つの事例発表をおこなった。事例発表は、①清水一文氏「竜山石切場」、②乗岡実氏「岡山城」、③近藤滋氏「安土城」、④宮崎素一氏「赤穂城」、⑤大谷輝彦氏「姫路城」で、城郭や城下町の価値を継承するためのまちづくりの視点や、石垣の修理技術を継承するための施策などについての報告があった。その後、田中哲雄氏(日本城郭研究センター名誉館長)をコーディネーターに、講演者・発表者による総合討議をおこない、城郭における石垣修理技術の継承の重要性とともに、そのための後継者育成や体制整備といった課題を議論した。

(恵谷 浩子)

◆木簡学会研究集会

2009年12月5・6日、第31回木簡学会総会・研究集会を開催した(会場：5日奈良県歯科医師会館講堂、6日奈良県新公会堂レセプションホール。参加者147名)。

5日は総会后、渡辺晃宏「2009年全国出土の木簡」で木簡出土状況を概観した後、古川淳一氏(青森県史編さんグループ)「自治体史における出土文字資料集—青森県史の編集を通じて」、今井晃樹氏(奈文研)「平城宮東方官衙の調査」の2本の報告があった。古川報告は東北六県と北海道・新潟県の出土文字資料を網羅する資料集刊行の経験に基づく出土文字資料集編纂のあり方の提起、今井報告は平城宮で初の発見となる焼却土坑で、十万吨規模の木簡群の出土となることが予想される東方官衙の土坑SK19189の発掘調査所見の紹介である。

6日は、久保邦江氏・武田和哉氏(奈良市教委)による「奈良市西大寺旧境内の調査と木簡」の報告があり、イスラム陶器など特異な遺物が共伴し、内容的にも寺院の範疇を遙かに超える木簡群と出土遺構をめぐって活発な議論があった。

なお、会誌『木簡研究』第31号を編集・刊行した(編集担当：浅野啓介)。

(渡辺 晃宏)

文化庁が実施する宮跡復原整備事業等への指導・助言・協力等

●平城宮跡の整備

平城宮跡の整備で最大の事業である第一次大極殿正殿の復原事業については、従来、設計・施工・監理業務に関して、文化庁および文部科学省大臣官房文教施設企画部参事官付平城宮跡整備事務所に指導・助言をおこなってきたが、建物自体は2008年度にほぼ完成し、2009年度はおもに文化庁が事業主である大極殿内部に設置する、高御座の外観をイメージできる実物大模型の設計・施工に対して助言をおこなった。

高御座の外観をイメージできる実物大模型は、基本的には平成8年度に製作した高御座1/10模型に倣い、実物大であることを考慮して必要な補強等をおこなう方針で設計監修した。補強をおこなったのは見え隠れとなる床下部分で、部材にはひび割れへの対策を兼ねて集成材を多用した。躯体は1/10模型とほぼ変わらないが、頂部および八角各隅の葺手上的鳳凰、長押金物、敷物、帳等の文様は、大極殿との調和、実物大での再現性などの点を勘案して、1/10模型から一部修正した。

このほか2010年4～11月に開催される平城遷都1300年祭にむけて、展示の更新を中心とする平城宮跡資料館（奈文研事業）および遺構展示館（文化庁事業）の改修をおこなった。遺構展示館では、露出展示遺構の保存処理を施すとともに、湧水を防ぐために柱穴底部を砂でかさ上げした。また国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所、平城遷都1300年協会などの事業に対し、平城宮跡内の掘削に対する立会などの指導・助言をおこなった。

（箱崎 和久）

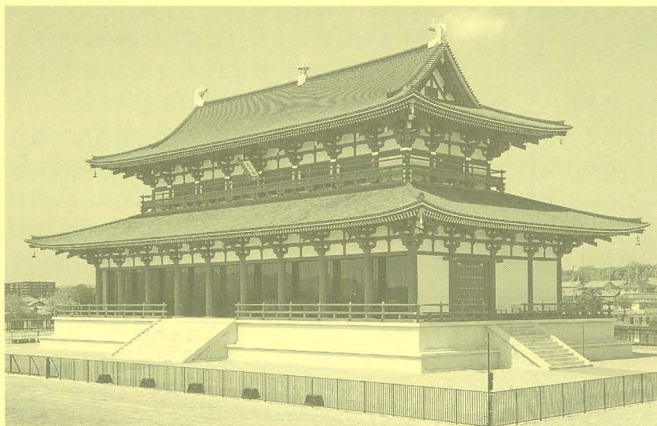
●高松塚古墳仮整備のための発掘調査

高松塚古墳の仮整備事業は、国宝壁画の修理が完了するまでの間、高松塚古墳の墳丘を1300年前の築造当初の形状に復元整備するもので、これにともなう発掘調査を2008年度から文化庁の委託事業として実施している。墳丘復元のための基礎資料を収集するとともに、1974年建設の保存施設が墳丘整備にともない撤去されることをうけて、工事時の立会と施設撤去後の再調査を実施した。保存施設の撤去工事は2008年度に2階部分が完了しており、残る一階部分の工事が2008年度末から2009年度初めにかけて施工された。これをうけて2009年度の発掘調査は、保存施設1階部分の撤去後に再露出した1974年の旧発掘区の再記録作業を中心に、5月18日～6月11日まで実施した。

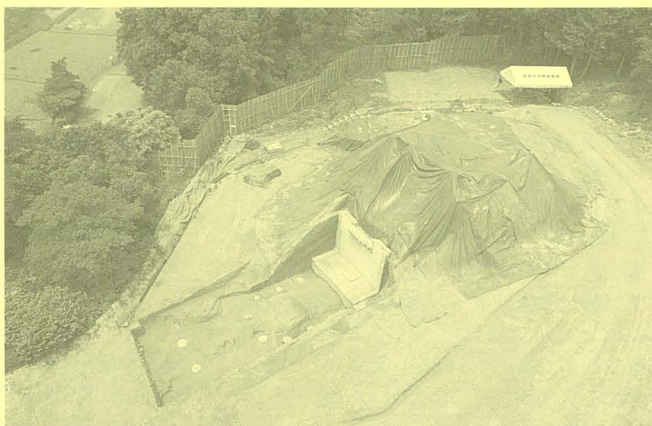
調査では旧発掘区壁面を再分層し、墳丘封土である版築層、7世紀代の土器片を含む整地土層、南東側に向かって下降する古墳築造以前の旧表土および地山の様相を観察、記録した。高松塚古墳では墳丘構築に先立ち、北側では丘陵斜面を平坦に開削するとともに、南側では古墳築造以前の谷を埋め立てて、墳丘を築くための基礎面を造成していることが推測されてきた。調査の結果、古墳築造以前の旧地形や谷の埋め立ての状況を具体的に把握することができ、墳丘の構築に先駆けて、大規模な基礎造成がなされた様子が明らかとなった。

調査の終了後に施工された墳丘の復元工事に際しては、現地にて学術的な助言や協議をおこなうとともに、遺構面が安全に保護されるよう経過を観察した。2009年10月24日に仮整備工事は無事に竣工し、一般に公開されている。

（廣瀬 覚）



完成した大極殿（撮影日：平成22年4月）



保存施設1階部分撤去後の高松塚古墳（南東から）

●キトラ古墳出土遺物等の調査研究

キトラ古墳関係の事業では、発掘調査により出土した遺物に対するの整理作業、保存処理、分析調査および展示活用のための作業をおこなった。

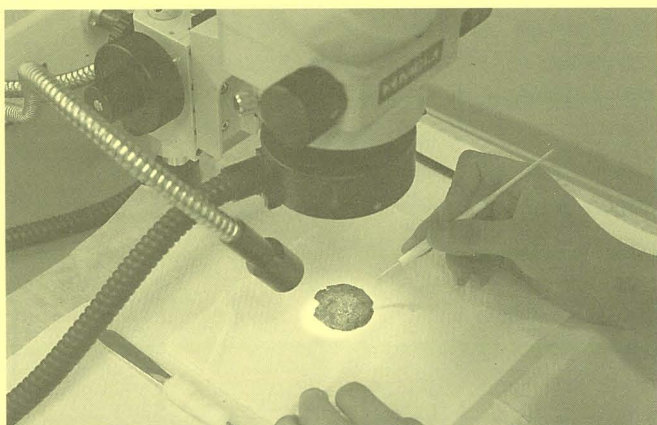
金属製遺物の保存処理は、石室内および石室外より出土した小片43点についての透過X線撮影などの構造調査を実施した。金属片のうち、銅・金銅・銀製品については、非破壊分析による蛍光X線分析をおこない、材質に関する基礎データを取得した。各金属片は顕微鏡下にて付着土壌のクリーニングをし、その後、アクリル樹脂による強化処理をした。銅・金銅製品については安定化処理を実施し、その後アクリル樹脂による強化処理をした。処理後の遺物は腐食性ガスや酸素、水分の影響を低くした環境をつくり、その中で保管している。

分析調査は、石室内出土の直径が約1mmで緑色を呈する微小鉛ガラスに関して、微量成分分析を実施した。現在このガラス製品は用途などが不明であるため、微量元素の化学組成についての特徴を明確にし、今後の研究に有用なデータを獲得できた。

展示活用は、キトラ古墳壁画のハイビジョン3DCGナレーションの吹き込み作業（日本語版）を、ショートバージョンおよびロングバージョンの2種類について実施し、今後の展示などに有効活用できる映像ビデオを作成した。

キトラ古墳は今後墳丘の整備が予定されており、整備方針を検討するため、これまでのキトラ古墳の発掘成果を総括するとともに、高松塚古墳やマルコ山古墳をはじめとした関連する古墳の墳丘の現地踏査を実施し、現況および整備状況を確認した。また、春・秋の壁画の集中剥ぎ取り作業には研究員1名を派遣し、これを支援した。

(降幡 順子 玉田 芳英)



キトラ古墳出土金属製品のクリーニング作業

発掘調査現地説明会・見学会

◆2009年6月20日(土)

平城第454次(中央区第1次大極殿院内庭部)発掘調査現地説明会
都城発掘調査部(平城地区)遺構研究室 大林 潤
参加者人数:755人 調査面積:約1,558㎡

◆2009年6月21日(日)

飛鳥藤原第157次(甘樫丘東麓遺跡)発掘調査現地見学会
都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)考古第三研究室 次山 淳
参加者数:1,134人 調査面積:1,150㎡

◆2009年9月27日(日)

平城第458次(興福寺南大門)発掘調査現地見学会
都城発掘調査部(平城地区)考古第二研究室 森川 実
参加者数:2,265人 調査面積:約830㎡

◆2009年11月29日(日)

飛鳥藤原第160次(藤原宮大極殿院回廊)発掘調査現地説明会
都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)遺構研究室 高橋 知奈津
参加者数:945人 調査面積:約1,425㎡

◆2010年2月20日(土)

平城第446次(平城宮東院地区西北部)発掘調査現地説明会
都城発掘調査部(平城地区)遺構研究室 鈴木 智大
考古第一研究室 国武 貞克
参加者数:840人 調査面積:1,505㎡

◆2010年3月20日(土)

飛鳥藤原第161次(甘樫丘東麓遺跡)発掘調査現地見学会
都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)遺構研究室 番 光
参加者数:1,245人 調査面積:846㎡

2 研修・指導と教育

埋蔵文化財担当者研修と指導

埋蔵文化財の保護・活用を推進し、国民に対するサービスの向上をはかるため、地方公共団体等の埋蔵文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。2009年度は一般研修を廃止し、専門研修12課程を実施した（2009年度埋蔵文化財担当者研修課程の一覧参照）。研修の多くは、講義形式が主体であるが、研修後の感想文などによると、実地踏査や実技・実習を取り入れた研修が好評であった。研修総日数105日、研修生総数130名であった。

埋蔵文化財センター及び各研究部では、要請にしたがって地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査、出土遺物の保存修理、遺跡の保存、遺跡整備等に関して、指導および助言等の協力をおこなっている。2009年度の主な協力について一覧を別表に掲載した。このほか、文化庁、各公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査をはじめ、遺跡・遺物の保存、遺跡の整備および公開に関する調査、地下遺構の探査、動物遺存体分析、年輪年代測定などの共同研究や受託研究も進めている。

京都大学(大学院)との連携教育

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻－文化・地域環境論講座の文化遺産学分野の客員教員として6名（小野健吉・清水重敦・小澤 毅・高妻洋成・

松井 章・大河内隆之）が、それぞれ修士課程の環境考古学論・文化遺産学演習・遺跡調査法論・保存科学論及び年輪年代学論・文化的景観論・日本庭園文化論を担当し、博士後期課程では、全員が共生文明学特別研究や文化遺産学特別演習を担当した。

授業では、都城・寺院を対象とした考古学や、建築史学、年輪年代学、保存科学、環境考古学などの講義・演習・実習等をおこない、各分野所属の院生（修士課程5名、博士後期課程2名）の教育指導にあたった。

京都大学大学院人間・環境学研究科では、2009年度、パレスチナからの国費留学生1名が博士号を授与された。奈文研の客員分野の院生が博士号を取得するのは3人目である。

奈良女子大学(大学院)との連携教育

奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員教員として、小池伸彦（客員教授）、次山淳（客員准教授）及び渡邊晃宏（客員教授）がそれぞれ、「文化財学の諸問題」、「歴史考古学特論」、「歴史資料論」を担当し、博士後期課程の大学院生の指導をおこなった。

いずれも、飛鳥地域、藤原宮・京跡、平城宮・京跡などの遺跡の発掘調査、埴塼や羽口、木製品、木簡をはじめとする遺物の調査研究に密着した授業であり、大学における通常の授業では経験できない、奈文研ならではの特色ある教育を実践した。

2009年度 日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧 （委員の委嘱を受けているもの）

(青森) 三内丸山遺跡 縄文遺跡群	(京都) 恭仁宮跡 長岡宮跡 宇治川太閤堤遺跡	(広島) 安芸国分寺跡
(岩手) 志波城跡 平泉遺跡群	(大阪) 新堂廃寺等 百濟寺跡 和泉黄金塚古墳 高槻市史跡 鳥坂寺跡	(岡山) 第二次山陽遺跡 備中松山城跡
(宮城) 多賀城跡	(兵庫) 法隆寺鎮座播磨国鶴荘史跡 新宮宮内遺跡 和田岬砲台 姫路城跡 三ツ塚廃寺跡	(山口) 下関市史跡
(福島) 宮川遺跡	(奈良) 旧大乘院庭園 平城京左京三条二坊宮跡庭園	(徳島) 阿波国分尼寺跡 藍住町勝端城館跡
(栃木) 上神主・茂原官衙遺跡 長者ヶ平官衙遺跡附東山遺跡 高原山黒曜石原産地遺跡群	中宮寺跡 菓山古墳	(香川) 丸亀城跡 快天山古墳 屋嶋城跡 中寺廃寺跡
(神奈川) 下寺尾七堂伽藍跡	檀原市伝統的建造物群 大安寺旧境内 赤土山古墳 薬師寺東塔 宇陀市松山地区伝統的建造物群 五條市伝統的建造物群 唐古・鍵遺跡	(愛媛) 久米官衙遺跡群
(長野) 柳沢遺跡	(鳥取) 妻木晩田遺跡 伯耆古代の丘 栃本廃寺跡	(福岡) 大宰府史跡 鴻臚館跡 三雲遺跡等
(岐阜) 関ヶ原古戦場	青谷上寺地遺跡 浦富海岸	(長崎) 原の辻遺跡 鷹島海底遺跡
(静岡) 新居関跡 遠江国分寺跡	(島根) 医光寺庭園	(宮崎) 日向国府跡
(石川) 加賀藩主前田家墓所		
(愛知) 本光寺		
(三重) 斎宮跡 諸戸氏庭園 伊勢国分寺跡		
(滋賀) 大津市伝統的建造物群 下之郷遺跡		

2009年度 埋蔵文化財担当者研修課程一覧

区分	課 程	実施期日	定 員	対 象	内 容	担 当 室	研修日数	申込者数	受講者数
専 門 研 修	遺跡探査課程	6月2日 ～ 6月5日	10名	地域の中核となる地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	遺跡・遺構の探査に関して必要な専門的知識と技術の研修	遺跡・調査技術研究室	4日	3名	3名
	建築遺構調査課程	6月15日 ～ 6月19日	12名	〃	建築遺構の調査に関して必要な専門的知識と技術の研修	遺構研究室	5日	14名	14名
	文化財写真I (基礎)課程	7月7日 ～ 7月23日	10名	〃	埋蔵文化財調査における写真業務のうち、高品質な写真資料作成に必要な知識と観察眼を白黒暗室処理実習を中心に習得する研修	写真室	17日	7名	7名
	文化財写真II (応用)課程	7月23日 ～ 8月6日	10名	〃	埋蔵文化財調査における写真業務のうち、撮影から写真プリント制作までの実習を通して資料写真制作に必要な知識と技術を習得する研修	写真室	15日	9名	9名
	古代陶磁器調査課程	9月1日 ～ 9月9日	12名	〃	古代遺跡出土中国・日本陶磁器の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	考古第二研究室	9日	9名	9名
	保存科学I (無機質遺物)課程	10月15日 ～ 10月23日	10名	〃	遺物・遺構の保存科学的な調査法および保存修理に関する基礎知識と技術の習得を目指す研修	保存修復科学研究室	9日	9名	9名
	保存科学II (有機質遺物)課程	10月23日 ～ 10月30日	10名	〃	遺物・遺構の保存科学的な調査法および保存修理に関する基礎知識と技術の習得を目指す研修	保存修復科学研究室	8日	7名	7名
	遺跡地図情報課程	11月17日 ～ 11月20日	16名	〃	埋蔵文化財の調査研究へのGISの応用に関する基礎的知識の研修	文化財情報研究室	4日	15名	15名
	自然科学的年代決定法課程	11月30日 ～ 12月4日	12名	〃	年輪年代法とC14年代測定法を中心とする、自然科学的手法による年代測定に関する専門的知識と技術の研修	年代学研究室	5日	7名	7名
	遺跡整備活用課程	1月12日 ～ 1月22日	12名	〃	遺跡の保存・整備に必要な専門的知識と技術の研修	遺跡整備研究室	11日	16名	15名
	報告書作成課程	1月28日 ～ 2月5日	16名	〃	見やすく読みやすい報告書の作り方と、図録・学術誌編集の基礎に関する研修	企画調整室	9日	21名	21名
地質環境調査課程	2月16日 ～ 2月24日	12名	〃	環境考古学の基幹を構成する地質環境分野の最新の研究法とその成果についての専門的知識と技術の研修	環境考古学研究室	9日	14名	14名	

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展「キトラ古墳壁画四神－青龍白虎－」

2009年4月17日～6月21日

2009年度は、キトラ古墳壁画の「青龍」と「白虎」を特別公開することから、古くから対のものとして取り扱われている龍虎について、山東省済南市博物館からの購入品、河北省文物研究所からの借用品を含めて展示した。特別公開は、5月8日から24日まで実施した。また、5月16日に開催された文化庁主催の記念講演会をサポートした。

◆夏期企画展「甦るクメール文明－世界文化遺産アンコール遺跡群－」

2009年8月1日～8月30日

写真家バク斎藤氏の作品の展示を中心とする「甦るクメール文明－世界文化遺産アンコール遺跡群－」を開催した。また、期間中の8月2日に講演会、8月1日、8月2日、8月14日、8月15日にギャラリートークをそれぞれおこなった。

◆秋期特別展「北方騎馬民族のかがやき－三燕文化の考古新発見－」

2009年10月16日～11月29日

遼寧省文物考古研究所との共同研究の成果を公開する「北方騎馬民族のかがやき－三燕文化の考古新発見－」を同研究所、遼寧省博物館、朝陽市博物館から遼寧省喇嘛洞遺跡出土品を中心とする展示品40件を借用して開催した。また、10月17日には、日中特別講演会をおこなった。

◆冬期企画展「飛鳥の考古学2009」

2010年1月22日～2月28日

例年恒例の「飛鳥の考古学」を明日香村教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所とともに開催し、2008年度の飛鳥地域での考古学的な調査成果を展示した。

平城宮跡資料館の展示

平城宮跡資料館は、平城遷都1300年祭に伴い改修することになり、2010年4月のリニューアルオープンに向け、2009年6月1日より閉館とした。

◆本庁舎ガイダンスコーナーの開設

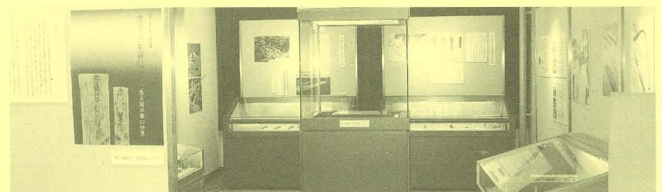
2009年8月3日～

平城宮跡資料館閉館中における、研究成果の公開や情報発信のため、2009年8月より本庁舎入口にガイダンスコーナーを設置し、発掘調査速報・国際学術交流・情報コーナーの常設展を実施するとともに、企画展も開催した。

◆特別企画展「地下の正倉院展－二条大路木簡の世界」

2009年10月20日～11月29日

例年平城宮跡資料館で開催していた木簡展を、今年度は本庁舎ガイダンスコーナーで実施した。1988年に出土した平城京二条大路濠状遺構の木簡約80点を展示した。2週間ごとに展示替え・ギャラリートークを実施し、会期中3,353人が来訪した。



特別企画展「地下の正倉院展－二条大路木簡の世界」

◆平城宮跡資料館の改修

2009年6月1日～

新しい平城宮跡資料館は、平城宮のガイダンス施設としての役割を担うため、分かりやすい展示・解説を目指した。見て分かる展示として役所や宮殿の内部を実物大のジオラマで再現し、遺物展示では平城宮の各テーマに沿った展示と、研究者の出土遺物に対する視点を紹介する研究室コーナーを柱とした。具体的な展示内容は、展示企画室と都城発掘調査部の展示担当者が協議のうえおこなった。

2009年度 入館者数

飛鳥資料館（有料）*観覧料の詳細は61頁	平城宮跡資料館（無料）	合計
77,347人	25,127人(2009年5月31日まで)	102,474人

解説ボランティア事業

平城宮跡を訪れる観光客に案内や解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業を1999年10月から実施している。

ボランティアの募集はこれまでに4回おこなわれ、2010年3月31日現在119名（1期生43名、2期生18名、3期生33名、4期生25名）が登録されている。ボランティアに登録された者は所定の研修を受けた後、各人概ね月2～3日の活動をおこなっている。

2009年度は、平城宮跡資料館は6月から、遺構展示館は11月からリニューアル工事のため休館していたが、

1日当たり5～8名が毎日（休館日をのぞく）、東院庭園、朱雀門の公開施設等を拠点に、延べ8万余名に解説をおこなった。

この解説ボランティア事業は、文化庁の「文化ボランティア通信」をはじめマスコミ、奈良県のHP、観光情報誌等に何度も採り上げられ、熟達した高度な文化解説に来訪者からのお礼の手紙が多く寄せられている。

また、ボランティアの高い学習意欲と熱意により、「ボランティアだより」を作成している。

奈良文化財研究所は、ボランティア全員に活動着を配布するほか、2009年度は特に翌年から開催される平城遷都1300年祭に備えて、研究所員等による研修や説明会を10回余りおこなう等、ボランティアの知識向上に資するため積極的な支援をおこなった。

2009年度 平城宮跡解説ボランティア活動状況

ボランティア活動のべ人数	解説を受けた来訪者のべ人数			
	団体		個人	計
	学生	一般		
1,631	25,344	19,581	35,869	80,794

図書資料・データベースの公開

〈図書〉

図書資料室では、文化財資料のナショナルセンターとなるべく、歴史・考古学分野をはじめ、巾広く文化財関係の書籍及び写真資料を収集している。また、本庁舎図書資料室は一般公開施設と位置づけて公開しており、所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌及び展覧会カタログ等の閲覧・複写のサービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて複写サービスを実施している。

また、研究所の刊行物についても、機関リポジトリを作成し、画像データとしてインターネット公開をおこなっている。

〈データベース〉

本研究所では、文化財情報の電子化をおこない、文化財関係の各種データベースを継続的に作成している。公開するデータベースは全てWebブラウザでの検索及び閲覧が可能で、2009年度は77万3千件のアクセスを得ている。

公開データベース一覧	2008年度アクセス件数
木簡データベース	23,513
木簡画像データベース【木簡字典】	13,210
全国木簡出土遺跡・報告書データベース	1,154
軒瓦データベース	1,815
遺跡データベース	26,768
地方官衙関係遺跡データベース	1,428
古代寺院遺跡データベース	1,032
官衙関係遺跡整備データベース	1,366
斜面保護データベース	961
発掘庭園データベース	1,491
Archaeologically Excavated Japanese Gardens	1,624
OPAC（所蔵図書データベース）	662,374
報告書抄録データベース	5,796
薬師寺典籍文書データベース	1,182
大宮家文書データベース	380
学術情報リポジトリ	29,228
合計	773,322

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所学報

- 第1冊 仏師運慶の研究(1954)
 第2冊 修学院離宮の復原的研究(1954)
 第3冊 文化史論叢(1955)
 第4冊 奈良時代僧房の研究(1956)
 第5冊 飛鳥寺発掘調査報告(1957)
 第6冊 中世庭園文化史(1958)
 第7冊 興福寺食堂発掘調査報告(1958)
 第8冊 文化財論叢I(1959)
 第9冊 川原寺発掘調査報告(1959)
 第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告(1960)
 第11冊 院の御所と御堂－院家建築の研究－(1961)
 第12冊 巧匠安阿弥陀仏快慶(1962)
 第13冊 寝殿造系庭園の立地的考察(1962)
 第14冊 唐招提寺蔵「レース」と「金亀舍利塔」に関する研究(1962)
 第15冊 平城宮発掘調査報告II
 官衙地域の調査(1962)
 第16冊 平城宮発掘調査報告III
 内裏地域の調査(1963)
 第17冊 平城宮発掘調査報告IV
 官衙地域の調査2(1965)
 第18冊 小堀遠州の作事(1965)
 第19冊 藤原氏の氏寺とその院家(1967)
 第20冊 名物裂の成立(1969)
 第21冊 研究論集I(1971)
 第22冊 研究論集II(1973)
 第23冊 平城宮発掘調査報告VI
 平城京左京一条三坊の調査(1974)
 第24冊 高山－町並調査報告－(1974)
 第25冊 平城京左京三条二坊(1975)
 第26冊 平城宮発掘調査報告VII
 内裏北外郭の調査(1975)
 第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告I(1975)
 第28冊 研究論集III(1975)
 第29冊 木曾奈良井－町並調査報告－(1975)
 第30冊 五條－町並調査の記録－(1976)
 第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告II(1977)
 第32冊 研究論集IV(1977)
 第33冊 イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告(1977)
 第34冊 平城宮発掘調査報告IX
 宮城門・大垣の調査(1977)
 第35冊 研究論集V(1978)
 第36冊 平城宮整備調査報告I(1978)
 第37冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告III(1979)
 第38冊 研究論集VI(1979)
 第39冊 平城宮発掘調査報告X
 古墳時代I(1980)
 第40冊 平城宮発掘調査報告XI
 第一次大極殿地域の調査(1981)
 第41冊 研究論集VII(1984)
 第42冊 平城宮発掘調査報告XII
 馬寮地域の調査(1984)
 第43冊 日本における近世民家(農家)の系統的発展(1984)
 第44冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告(1985)
 第45冊 薬師寺発掘調査報告(1986)
 第46冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書(1988)
 第47冊 研究論集VIII(1988)
 第48冊 年輪に歴史を読む
 －日本における古年輪学の成立－(1990)
 第49冊 研究論集IX(1990)
 第50冊 平城宮跡発掘調査報告書XIII
 内裏の調査II(1990)
 第51冊 平城宮跡発掘調査報告書XIV
 平城宮第二次大極殿院の調査(1992)
 第52冊 西隆寺発掘調査報告書(1992)
 第53冊 平城宮朱雀門の復原的研究(1993)
 第54冊 平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告
 －長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－(1994)
 第55冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告IV
 －飛鳥水落遺跡の調査－(1994)
 第56冊 平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告(1997)
 第57冊 日本の信仰遺跡(1998)
 第58冊 研究論集X(1999)

- 第59冊 中世瓦の研究(1999)
- 第60冊 研究論集XI(1999)
- 第61冊 研究論集XII
長屋王家・二条大路木簡を読む(2000)
- 第62冊 史跡頭塔発掘調査報告(2000)
- 第63冊 山田寺発掘調査報告(2001)
- 第64冊 研究論集XIII
中国古代の葬玉(2001)
- 第65冊 文化財論叢Ⅲ 奈良文化財研究所
創立五十周年記念論文集(2002)
- 第66冊 研究論集XIV
東アジアの古代都城(2002)
- 第67冊 平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
旧石器時代編[法華寺南遺跡](2002)
- 第68冊 吉備池廃寺発掘調査報告
百濟大寺跡の調査(2002)
- 第69冊 平城宮発掘調査報告XV
東院庭園地区の調査(2002)
- 第70冊 平城宮発掘調査報告XVI
兵部省地区の調査(2004)
- 第71冊 飛鳥池遺跡発掘調査報告(2004)
- 第72冊 奈良山発掘調査報告I
石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査(2004)
- 第73冊 タニ窯跡群A 6号窯発掘調査報告書
-アンコール文化遺産保護共同研究報告集-(2004)
- 第74冊 古代庭園研究I(2005)
- 第75冊 研究論集XV
中国古代の銅剣(2006)
- 第76冊 法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告(2006)
- 第77冊 日韓文化財論集I(2007)
- 第78冊 近世瓦の研究(2008)
- 第79冊 平城宮第一次大極殿研究1 基壇・礎石編(2008)
- 第80冊 平城宮第一次大極殿研究4 瓦・屋根編(2008)
- 第81冊 平城宮第一次大極殿研究2 木部(2010)
- 第82冊 平城宮第一次大極殿研究3 彩色・金具(2009)
- 第83冊 研究論集XVI
鉄製武器の流通と初期国家系形成(2009)
- 第3冊 仁和寺史料 寺誌編一(1963)
- 第4冊 俊乘房重源史料集成(1964)
- 第5冊 平城宮木簡一 函版・解説(1966・1969)
(平城宮発掘調査報告V)
- 第6冊 仁和寺史料 寺誌編二(1967)
- 第7冊 唐招提寺史料第一(1970)
- 第8冊 平城宮木簡二 函版・解説(1974・1975)
(平城宮発掘調査報告Ⅷ)
- 第9冊 日本美術院彫刻等修理記録I(1974)
- 第10冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ(1975)
- 第11冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅲ(1976)
- 第12冊 藤原宮木簡一 函版・解説(1977)
- 第13冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅳ(1977)
- 第14冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅴ(1978)
- 第15冊 東大寺文書目録第一巻(1978)
- 第16冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ(1979)
- 第17冊 平城宮木簡三 函版・解説(1979)
- 第18冊 藤原宮木簡二 函版・解説(1979)
- 第19冊 東大寺文書目録第二巻(1979)
- 第20冊 日本美術院彫刻等修理記録Ⅶ(1980)
- 第21冊 東大寺文書目録第三巻(1980)
- 第22冊 七大寺巡礼私記(1981)
- 第23冊 東大寺文書目録第四巻(1981)
- 第24冊 東大寺文書目録第五巻(1982)
- 第25冊 平城宮出土墨書土器集成I(1982)
- 第26冊 東大寺文書目録第六巻(1983)
- 第27冊 木器集成図録-近畿古代編-(1984)
- 第28冊 平城宮木簡四 函版・解説(1985)
- 第29冊 興福寺典籍文書目録第1巻(1985)
- 第30冊 山内清男考古資料I(1988)
- 第31冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅱ(1988)
- 第32冊 山内清男考古資料2(1989)
- 第33冊 山内清男考古資料3(1991)
- 第34冊 山内清男考古資料4(1991)
- 第35冊 山内清男考古資料5(1991)
- 第36冊 木器集成図録-近畿原始編-(1992)
- 第37冊 梵鐘実測図集成(上)(1992)
- 第38冊 梵鐘実測図集成(下)(1993)
- 第39冊 山内清男考古資料6(1993)
- 第40冊 山田寺出土建築部材集成(1994)
- 第41冊 平城京木簡一-長屋王家木簡-(1994)
- 奈良文化財研究所史料**
- 第1冊 南無阿弥陀仏作善集(複製)(1951)
- 第2冊 西大寺観尊伝記集成(1953)

- 第42冊 平城宮木簡五 図版・解説(1995)
 第43冊 山内清男考古資料7(1995)
 第44冊 興福寺典籍文書目録第2巻(1995)
 第45冊 北浦定政関係資料(1996)
 第46冊 山内清男考古資料8(1996)
 第47冊 北魏洛陽永寧寺(1997)
 第48冊 発掘庭園資料(1997)
 第49冊 山内清男考古資料9(1997)
 第50冊 山内清男考古資料10(1998)
 第51冊 山内清男考古資料11(1999)
 第52冊 地域文化財の保存修復 考え方と方法(1999)
 第53冊 平城京木簡二－長屋王家木簡二－(2000)
 第54冊 山内清男考古資料12(2000)
 第55冊 法隆寺古絵図集(2001)
 第56冊 法隆寺考古資料(2001)
 第57冊 日中古代都城図録(2002)
 第58冊 山内清男考古資料13(2002)
 第59冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅲ(2002)
 第60冊 平城京条坊総合地図(2002)
 第61冊 鞆義黄冶唐三彩(2002)
 第62冊 北浦定政関係資料 松の落ち葉(2002)
 第63冊 平城宮木簡六 図版・解説(2003)
 第64冊 平城京出土古代官銭集成Ⅰ(2003)
 第65冊 北浦定政関係資料 松の落ち葉二(2003)
 第66冊 山内清男考古資料14(2003)
 第67冊 興福寺典籍文書目録第3巻(2003)
 第68冊 古代東アジアの金属製容器Ⅰ 中国編(2003)
 第69冊 平城京漆紙文書一(2004)
 第70冊 山内清男考古資料15(2004)
 第71冊 古代東アジアの金属製容器Ⅱ 朝鮮・日本編(2004)
 第72冊 畿内産暗文土師器関連資料Ⅰ 西日本編(2004)
 第73冊 黄冶唐三彩窯の考古新発見(2005)
 第74冊 山内清男考古資料16(2005)
 第75冊 平城京木簡三－二条大路木簡一－(2005)
 第76冊 評制下荷札木簡集成(2005)
 第77冊 平城京出土陶硯集成Ⅰ(2005)
 第78冊 黒草紙・新黒双紙(2006)
 第79冊 飛鳥藤原京木簡一 図版・解説(2006)
 ー飛鳥池・山田寺木簡ー
 第80冊 平城京出土陶硯集成Ⅱ－平城京・寺院－(2006)
 第81冊 高松塚古墳フォトマップ資料集(2008)

- 第82冊 飛鳥藤原京木簡二 図版・解説(2008)
 ー藤原京木簡一ー
 第83冊 興福寺典籍文書目録第四巻(2008)
 第84冊 山内清男考古資料17(2008)
 第85冊 平城宮木簡七 図版・解説(2009)

奈良文化財研究所基準資料

- 第1冊 瓦編1 解説(1973)
 第2冊 瓦編2 解説(1974)
 第3冊 瓦編3 解説(1975)
 第4冊 瓦編4 解説(1976)
 第5冊 瓦編5 解説(1976)
 第6冊 瓦編6 解説(1978)
 第7冊 瓦編7 解説(1979)
 第8冊 瓦編8 解説(1980)
 第9冊 瓦編9 解説(1983)

飛鳥資料館図録

- 第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏(1976)
 第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文篇(1976)
 第3冊 日本古代の墓誌(1977)
 第4冊 日本古代の墓誌 銘文篇(1978)
 第5冊 古代の誕生仏(1978)
 第6冊 飛鳥時代の古墳(1979)
 第7冊 日本古代の鴟尾(1980)
 第8冊 山田寺展(1981)
 第9冊 高松塚拾年－壁画保存の歩み－(1982)
 第10冊 渡来人の寺－桧隈寺と坂田寺－(1983)
 第11冊 飛鳥の水時計(1983)
 第12冊 小建築の世界－埴輪から瓦塔まで－(1983)
 第13冊 藤原宮－半世紀にわたる調査と研究－(1984)
 第14冊 日本と韓国の塑像(1985)
 第15冊 飛鳥寺(1985)
 第16冊 飛鳥の石造物(1986)
 第17冊 萬葉乃衣食住(1986)
 第18冊 壬申の乱(1987)
 第19冊 古墳を科学する(1988)
 第20冊 聖徳太子の世界(1988)
 第21冊 仏舍利埋納(1989)
 第22冊 法隆寺金堂壁画飛天(1989)
 第23冊 日本書紀を掘る(1990)

- 第24冊 飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察(1991)
 第25冊 飛鳥の源流(1991)
 第26冊 飛鳥の工房(1992)
 第27冊 古代の形 飛鳥藤原の文様を追う(1994)
 第28冊 蘇我三代(1995)
 第29冊 斉明紀(1996)
 第30冊 遺跡を測る(1997)
 第31冊 それからの飛鳥(1998)
 第32冊 UTAMAKURA(1998)
 第33冊 幻のおおでら-百済大寺(1999)
 第34冊 鏡を作る 海獣葡萄鏡を中心として(1999)
 第35冊 あすかの石造物(2000)
 第36冊 飛鳥池遺跡(2000)
 第37冊 遺跡を探る(2001)
 第38冊 'あすか-以前'(2002)
 第39冊 A 0 の記憶(2002)
 第40冊 古年輪(2003)
 第41冊 飛鳥の湯屋(2003)
 第42冊 古代の梵鐘(2004)
 第43冊 飛鳥の奥津城
 -キトラ・カラト・マルコ・高松塚。(2004)
 第44冊 東アジアの古代苑池(2005)
 第45冊 キトラ古墳と発掘された壁画たち(2006)
 第46冊 キトラ古墳壁画四神玄武(2007)
 第47冊 奇偉莊嚴 山田寺(2007)
 第48冊 キトラ古墳壁画十二支-子・丑・寅-(2007)
 第49冊 まほろしの唐代精華
 -黄冶唐三彩窯の考古新発見-(2008)
 第50冊 キトラ古墳壁画四神-青龍白虎-(2009)
 第51冊 北方騎馬民族のかがやき-三燕文化の考古新
 発見-(2009)
 第52冊 キトラ古墳壁画四神(2009)
- 飛鳥資料館カタログ**
 第1冊 仏教伝来飛鳥への道(1975)
 第2冊 飛鳥の寺院遺跡1-最近の出土品(1975)
 第3冊 明日香の仏像(1978)
 第4冊 桜井の仏像(1979)
 第5冊 高取の仏像(1980)
 第6冊 橿原の仏像(1981)
 第7冊 飛鳥の王陵(1982)
- 第8冊 大官大寺-飛鳥最大の寺-(1985)
 第9冊 高松塚の新研究(1992)
 第10冊 飛鳥の一と-最近の調査から-(1994)
 第11冊 山田寺(1997)
 第12冊 山田寺東回廊再現(1997)
 第13冊 飛鳥のイメージ(2001)
 第14冊 古墳を飾る 音乗谷古墳の埴輪(2005)
 第15冊 うずもれた古文書
 -みやこの漆紙文書の世界-(2005)
 第16冊 飛鳥の金工-海獣葡萄鏡の諸相-(2006)
 第17冊 飛鳥の考古学2006(2006)
 第18冊 「とき」を撮す-発掘調査と写真-(2007)
 第19冊 飛鳥の考古学2007(2007)
 第20冊 飛鳥の考古学2008(2008)
 第21冊 飛鳥の考古学2009(2009)
- その他の刊行物(2009年度)**
 奈良文化財研究所紀要2009
 奈文研ニュースNo.33
 奈文研ニュースNo.34
 奈文研ニュースNo.35
 奈文研ニュースNo.36
 埋蔵文化財ニュース138
 埋蔵文化財ニュース139
 埋蔵文化財ニュース140
 埋蔵文化財ニュース141
 古代瓦研究IV
 古代瓦研究V
 文化的景観研究集会(第1回)報告書
 発掘のてびき-集落遺跡発掘編・整備報告書編-
 河南省窯跡発掘調査概要
 東アジアにおける理想卿と庭園
 保存科学における諸問題要旨集
 文化的景観基礎資料集成
 東アジア金属工芸史
 ニューズレター1号(西トップ寺院)
 平城京 奈良の都のまつりごととくらし(平城宮跡資料館図録)
 平城宮発掘出土木簡概報三十九
 平安時代庭園に関する研究3
 地下の正倉院展-二条大路木簡の世界-

※()内は発行年度

人事異動 (2009.4.1~2010.3.31)

●2009年4月1日付け

副所長	肥塚 隆保
兼・企画調整部長	
兼・企画調整部写真室長	
管理部長	多 昭彦
管理部業務課再雇用職員	飯田 信男
文化遺産部長	小野 健吉
都城発掘調査部長	井上 和人
都城発掘調査部副部長	深澤 芳樹
埋蔵文化財センター長	松井 章
兼・埋蔵文化財センター環境考古学研究室長	
企画調整部国際遺跡研究室長	杉山 洋
兼・企画調整部展示企画室長	
文化遺産部建造物研究室長	島田 敏男
文化遺産部景観研究室長	清水 重敦
都城発掘調査部考古第二研究室長	玉田 芳英
兼・飛鳥資料館学芸室長	加藤 真二
都城発掘調査部考古第三研究室長	次山 淳
都城発掘調査部遺構研究室長	箱崎 和久
埋蔵文化財センター年代学研究室長	大河内隆之
都城発掘調査部主任研究員	豊島 直博
都城発掘調査部主任研究員	今井 晃樹
都城発掘調査部主任研究員	馬場 基
企画調整部展示企画室	丹羽 崇史
兼・飛鳥資料館学芸室	
文化遺産部景観研究室	恵谷 浩子
都城発掘調査部考古第一研究室	芝 康次郎
都城発掘調査部考古第二研究室	城倉 正祥
都城発掘調査部考古第三研究室	森先 一貴
埋蔵文化財センター保存修復科学研究室	脇谷草一郎
文化庁文化財部文化財鑑査官	松村 恵司
文化庁文化財部記念物課文化財調査官(整備部門)	内田 和伸
文化庁文化財部美術学芸課技官(考古資料部門)	和田一之輔

●2009年5月1日付け

都城発掘調査部史料研究室	桑田 訓也
--------------	-------

●2009年7月1日付け

企画調整部国際遺跡研究室アソシエイトフェロー	田村 朋美
企画調整部展示企画室アソシエイトフェロー	渡邊 淳子

●2009年8月16日付け

都城発掘調査部考古第二研究室	若杉 智宏
都城発掘調査部考古第三研究室	庄田 慎矢
都城発掘調査部遺構研究室	海野 聡

●2009年10月1日付け

取・管理部業務課長	多 昭彦
管理部文化財情報課図書・情報係長	渡 勝弥
管理部管理課庶務係	高田 幸恵
文化遺産部景観研究室アソシエイトフェロー	松本将一郎
鳴門教育大学教務部社会連携課長	東 博信
奈良女子大学附属図書館図書課電子情報係長	太田 仁
東京文化財研究所管理部管理室企画渉外係	井手 真二

●2009年2月1日付け

都城発掘調査部考古第二研究室任期付研究員	中村亜希子
----------------------	-------

●2009年3月31日付け

定年退職	肥塚 隆保
定年退職	牛嶋 茂
辞職	栗野 隆

予算等

予算(予定額)

単位:千円

	2009年度	2010年度(予定額)
文部科学省からの運営費交付金(人件費を除く)	962,102	952,914
施設整備費	146,800	0
自己収入(入場料等)	29,625	29,921
計	1,138,527	982,835

土地と建物

単位:m²

	土地	建物(建面積/延面積)	建築年
本館地区	8,860.13	2,754.25/6,754.86	1964年他
平城宮跡資料館地区	※	10,630.53/16,149.67	1970年他
都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)	20,515.03	6016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥資料館地区	17,092.93	2657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡資料館地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費補助金(2010年4月14日現在)

単位:千円

研究種目	2009年度		(参考)2010年度	
	件数	金額	件数	金額
基盤研究(S)	1	20,020	1	23,660
基盤研究(A)	3	47,580	2	21,840
基盤研究(B)	4	16,380	3	14,430
基盤研究(C)	7	9,230	6	5,980
若手研究(B)	18	23,010	23	23,010
研究活動スタート支援〈若手研究(スタートアップ)〉	2	3,107	2	2,197
特別研究員奨励費	1	1,100	0	—
研究公開促進費(学術図書)	0	—	1	800

受託調査研究

単位:千円

区分	2008年度		2009年度	
	件数	金額	件数	金額
研究	14	40,283	14	38,188
発掘	6	53,865	5	26,262
計	20	94,148	19	64,450

職員一覧

